
h.o's.O.way

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

h · o · s · o · w a y

【NZコード】

N5977P

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

その世界では、魔力を持つ者は永きを生きていた。

『伝説』と呼ばれる朱髪黒瞳の裏魔術師ラジア・ゼルダと、そんな彼女に育てられた銀髪蒼瞳の魔力を持たない美麗青年剣士リザ・レストル。

一人の紡ぐ壮大な純愛ファンタジー開幕！

『Extra Chapter 1 / Witch of Glod en』2011年12月15日完結。
『Chapter 4』を開幕しました。

登場人物一覧（前書き）

登場順に記載。

また、極力気をつけてはいますが、多少のネタバレを含むので注意。
順次追加予定。

登場人物一覧

【ラジア・ゼルダ】

性別／女

年齢／不詳。外見年齢は22歳程度

容姿／朱髪黒瞳

職種／裏魔術師

『生ける伝説』『最強』などの異名を持つ裏魔術師。
高難易度の転移術を呪文詠唱なしで施行可能。
賭け事とお金に目がなく大食い。

地名や場所を覚える気が全くなく、気配にも疎い。

【リザ・レストル】

性別／男

年齢／24

容姿／銀髪蒼瞳

職種／剣士兼傭兵

幼少期ラジアに拾われて以来、現在まで共に旅をする美青年。
魔力はなく普通の人間だが、五感においては並の人間より優秀。
戦闘技術から賭け事まで、大抵のことはラジアに仕込まれている。

【ルシア・アズガルド】

性別／男

年齢／不詳。外見年齢は20代後半

容姿／黒髪朱瞳

職種／ラグト国上級貴族兼ラグト国ハシルス王城最上級専属魔術師

変態に近い嗜好を持ついろいろと歪んだ美麗紳士。
基本的に物腰は優雅で柔らかい。

【ミレンツィア・ドリス】

性別／女

年齢／『W i c t h o f G l o d e n』時で18歳

容姿／茶髪に翡翠色の瞳

職種／ラグト国ハシルス王城専属魔術師、後に第一王女アリア・リタリナ・ラグトリア付き魔術師となる。

基本的に高圧的な態度の魔術師。
一見して美少女。

【ビーチェ・カザリ】

性別／女

年齢／不詳

容姿／不明

職種／占い師

ラグト国の東側に位置するワーカー街に一見寂れた店を構える。
常に店内は暗く、基本的に知人友人相手にしか占いをしない。
消費型魔術師のため、外見は老婆であり、フードを被っている。

【アリア・リタリナ・ラグトリア】

性別／女

年齢／17

容姿／金髪紫瞳

職種／ラグト国第一王女

歌うことが好きなラグト国の姫君。

【ロイズ・フェアリー】

性別／男

年齢／『Witch of Gloden』時で57歳

容姿／白金髪に同色の瞳

職種／ラグト国ハシルス王城専属魔術師兼ミレンツィア付き専属副官

穏やかな気性のミレンツィアの部下。

『儂げな美少年』と謳われるほど容姿を持つ。
緩くウェーブしたショートボブがチャームポイント。

【ディノ・ブランゼス】

性別／男

年齢／不詳。外見は壮年。

容姿／アッシュグレーに白髪混じりの短髪にアッシュグレーの瞳

職種／ラグト国ハシルス王城専属魔術師総括

ラグト国における魔術師の実質的なトップ。
豪快で思慮深い。

【ゾルゲ・ヴァイヴァリー】

性別／男

年齢／不詳

容姿／黒髪黒瞳

職種／ラグト国ハシルス王城専属魔術師

軍人の方が向いていそうな規格外の体躯と粗野で大雑把な性格をしているが、人望は厚い。

【カウゼ・ララウ】

性別／女

年齢／不詳。外見年齢は20代中盤程度

容姿／黒髪灰瞳

職種／情報屋

魔力を持つ情報屋でリウゼの双子の姉。

エルリツツ小国リーツァイの街の南に位置するテテの森に事務所兼自宅を構える。

いつもポニーテールにしている。

騒がしい。

【リウゼ・ララウ】

性別／男

年齢／不詳。外見年齢は20代中盤程度

容姿／黒髪灰瞳

職種／賞金稼ぎ

魔力を持つ賞金稼ぎでカウゼの双子の弟。

カウゼと共にテテの森に住む。

割りとまともな思考回路の持ち主。

Opening - have one's own way

とある世界、ここは魔力を持つ者が存在し、彼らはその力故に永き時を生きていた。

そこに、その強大な魔力故『伝説』と呼ばれる裏魔術師がいた。彼女の名はラジア・ゼルダ。

朱き長髪を靡かせ、黒き夜色の瞳を持ち、その名を裏社会のみならず知らしめる彼女は、二つ名に違わず最強に等しかった。

孤高の彼女はいつしか、とあるきっかけにより少年を拾う。

彼の名は、リザ・レストル。

朱き月の如き彼女の色に反して、彼は優しく輝く月の如き銀色の髪と、深い海の如き蒼の瞳を持っていた。

そうして時は流れ、いつまでも若さを失わない彼女を追い越すように、少年は青年へと成長した。

その歳、二十四歳。

彼女の外見年齢は、出会った頃の一十一歳程度から変わらぬままで。そうしていつしか、彼は願うようになっていた。

いつまでも傍に。

そうしていつしか、彼女は願うようになっていた。

どうかしあわせに。

彼女は言つ、いつまでも変わらぬその姿で。

「あたしは夢を叶えない。貴方がそれを望んでも」

Opening - have one's own way (後書き)

『have one's own way(ハブ ワンズ オウン
ウーハイ)』

(和訳) 好き勝手に生きる
(転じて) それぞれの道

……みたいな意味合いでのタイトル。
ほぼ造語みたいな訳し方をしています。

寂れた酒場。

薄汚れたランプ。

木製のテーブルも大分くたびれており、カードを取ろうとしたら、少し引っ掛けた。

くわえ煙草で五枚のカード眺めて、あたしは密かにほくそ笑む。

「いいか？」

「いつでも」

目の前で同じく五枚のカード眺めるオヤジの言葉に答える。オヤジの喉元がごくりと鳴るのを見届けて、行く末を確信した。

「ええいっ、ままよ！ツーペア！」

ばんつとカードを卓上に叩き付け、オヤジはあたしの顔を見た。

ふん、甘いな。

「ロイヤルストレートフラッシュ」

ゆづくりと手元のカードを裏返して見せて。

がつくりと肩を落としたオヤジに、笑みを浮かべた。

「じゃ、そーゆー」と。これは貰つて行くからね

煙草を灰皿に捻付け、卓上の小袋を手に取る。
持ち上げるとじゅらりとう音と、心地良い重量感。

気分いい、最つ高。

あたしは満面の笑みで、立ち上がった。

「姉ちゃん、俺らを五人抜きとはかなりやるな。何者だ？」

肩を落としたまま、オヤジがあたしを見上げる。

「別に。ただの旅人」

短く答える。

まあ、間違つてはいない。

「また来るか？」

「気が向いたらね

オヤジはにやつと笑つた。

「ひつや、いらぬ」入られたらしき。

もつ一回位、来てやつてもいいか。

あたしはそんなことを考えて、寂れた酒場を後にした。

外に出れば、もう口はとつぱり暮れていた。

手に持った小袋に刃をやつてから、高く昇った刃を見上げる。

朱い刃。

あたしの髪と、同じ色。

少し睨んで、溜め息混じりに歩き出した。

「染めようかな……」

「何で？」

独り言に返事があつて、見知った気配によりいやへぬづく。
見れば、いつの間にか隣にいる青年。

「……リザか。相変わらず気配を消すのが上手いな」

こいつはリザ、リザ・レストル。

銀髪蒼瞳の美青年……に育つた。

まあ、綺麗になるだろうと踏んで、あたしが育てたんだけど。
あたしの観察眼は確かなものだった。

「ねえねえ、何で染めようとしたの？」

隣に並んで首を傾げる。

あたしを覗き込む様に。

見事な銀髪が、月の光を含んでさりと揺れた。

「今日は娼館に行けって言わなかつた？その分の金、渡した筈だけ
ど」

さつ氣なく話を変えて、リザに一瞥くれる。

「貰つたけど行かなかつた。だつて俺、ラジアちゃんといたいもん
「健全じやないな。溜まるじやない」

リザとはずつと一緒に旅をしてくる。

育てていたから、当たり前ではあるけれど。

彼が十五歳になつた頃から、定期的に娼館に通わせている。
男だからというのもあったが、それは主に、あたしが一人になりたい時だった。

「俺はラジアちゃんとやつたい

端正な顔が嬉しそうに歪められ、嬉しくないことを言った。

「駄目」

あつたと拒否して、そのまま歩みを進める。

リザとそういう行った行為をしたことがないわけではない。
何度も金がなくて、何度も一緒に寝て、その時、何度もやった。
男だから溜まっているのだろうと思つて相手をしていた。
何度もかしてわかつた。

リザがあたしに触れる時、そこには愛情がある。

それは、まことに。

愛情のあるそういう行った行為をあたしましない。
ある時から、そう決めている。

「フジアちゃんが嫌ならしない。けど、今日は一緒に寝てもいい?」

あたしは溜め息をついた。

駄目と叫んでも、リザは間違になくベッドに潜り込んで来るだらう。

宿部屋は一つしか取つていない。

娼館に行かせたので、安心していた。

まさか、戻つて来るとほ。考えていなかつた。

「……朱い月の夜は駄目だつて言つたはずだけれど

一応、遠い昔に言つつけたことを呼び出してみる。

「髪、染めるとか言つからだよ」

「それが何」

「今日は一緒に寝る。嬉しいなー」

投げ掛けた言葉はあつさつと遮られ、会話にはならなかつた。
溜め息をついて、朱い月を見上げる。

こんな夜は、やり切れない気持ちになるのだ。

リザは知らない。

何故あたしが朱い月を嫌うのか。

知るはずがない。

言つていないのでから。

理由は、遠い昔。

遠過ぎて、もう届かない昔。

普段は氣にもならない自分の朱い髪色が、こんな夜は嫌になる。

また溜め息が出せつになり、それを飲み込む。

そんなことは、無意味なのだ。

「……特別だからね」

その言葉に、リザはまた、嬉しそうに笑った。

「染めなくていいよ」

「何で？」

「俺は好きだから」

あたしは答えなかつた。

代わりに、その蒼い瞳に視線を投げれば、当たり前のよつにそれが交わつて『』なりに細められる。

いつからリザは、『こんな瞳であたしを見るよつになつたのだらう。熱を含んだ、愛しい者へと向ける瞳。』

あたしはそれに応えることは出来ない。

永い時を生きる。

あたしの中の強大な魔力が、普通の人のような時間の歩み方を許さない。

永い、永い、それこそ、いつ果てるともしれない命を。

「あんたを拾つたのは、間違いだつたかな」

呟いて、一度伏せてからその目を逸らす。リザは何も言わずに、ただ、笑つていた。

何はともあれ、今夜は一緒に寝るのだろう。

つばの中でやう決まつてしまつたりじこし、それにわざわざ、今更
びつこつ嘗つのも面倒くさい。

「……いつまで……、」

「え？」

「……何でもない」

「行くか」

わかっているのに知らない振りをして、曖昧に、あやふやにして。

朱い月の下、あたし達は宿屋へと足を進めた。

今夜はラジアちゃんと寝る。

俺はそれがすごく嬉しい。

ラジアちゃんは迷惑そうだった。

知っている、そんなことは知っているけれど。

ラジアちゃんは俺を想つていらない。

思つてはいるのだろうけれど。

それも、知つている。

知つているけれど、止められないんだ。

嫌がることはしない。

して欲しいと望むことは何でもしてあげる。

だから。

ずっと、永遠に傍にいさせて欲しい。

「うう」とベッドの上を転がりながら、横目でラジアちゃんを見た。
さつきから後ろ頭しか見ていない。

煙草をふかして、ただ、月を見上げている。
いや、多分、睨んでいる。

彼女に関して、俺の勘が外れたことはない。

朱い月の夜は一人にしろ。

捨てられた時、一番始めて言われたことだった。
最初は守っていたけれど、最近は守っていない。
いつも娼館に行く振りをして、部屋の外で待っている。

ドアが開いたことは、一度もない。

仕方がない、俺は気紛れに拾われただけなのだから。

「ラジアちゃん」

名前を呼んでみる。

寝返りを打てば、安いベッドが軽く軋んだ。

「ラジアちゃん」

もつて一度呼んでみる。

振り向かないどじりか、微動だにもしない。

「ラジアちゃん……」

「うぬせこ」

振り向かないまま、不機嫌な声が返って来た。

ああ、びっくり。

嬉しい。

それだけで、ものすごく嬉しかった。

俺はきっと今、ものすごく笑顔だと思つ。

煙草の白い煙がゅらりと揺れた。

ラジアちゃんが溜め息を吐いたんだろ？

そんなことでさえ嬉しく感じる。

自分のことで、彼女が溜め息を吐く。

そんなことで、どうしようもないほど、笑顔になるんだ。

俺は多分、病氣だ。

それは多分、と言つか絶対、ラジアちゃんにしか治せない。

ラジアちゃんは知っている。

けれど、治すつもりはないんだろう。
だから永遠に治らないけれど。

「いいんだ」

それでも。
小さく呟いた。

「何が」

朱い髪が軽く揺れ、その夜色の瞳が俺を映した。

どうしよう。

すごく嬉しい。

俺は思わず、目を細めた。

煙草を捻消して、ラジアちゃんは立ち上がるとベッドに腰掛けた。

白く華奢なその指が、俺の頭を撫でて。

ただただ、どうしようもないほどこの気持ちが、それに煽られた。

やばい。

非常にやばい。

やりたい。

こんなことでは、簡単に俺の体は反応する。
けれど、しない。

約束をしたのだから。

ラジアちゃんに擦り寄って、田を開じる。

「風呂に入つて来るから。先に寝てな」

「……うん」

優しく俺に言つて、ラジアちゃんは立ち上がった。

その綺麗な指が、あっけなくするりと頭から離れて行く。

寂しい、だなんて言えないままに。

ぱたんとドアの閉まる音に、俺は小さく溜め息を零した。

少し重たい瞼を開けて、そのままの体勢で窓に視線を投げる。

俺よりも長い時間、ラジアちゃんを奪っていた朱い月が、皮肉なほどに綺麗に見えた。

「何で」

「何で。

「俺じゃないの？」

「何で。

「わかるはずはない。

「きっとそれは、俺の知らない過去だから。

「俺の時間は限られている。

「残念だけれど、今のところは限られている。

「この世界で魔力を持つ者は三割程度で、どちらかと言えば珍しい部類の人間だ。

「その枠に、俺は入っていなかつた。

「ただそれだけなのに。

灰皿には、中途半端に消された煙草があつた。

手に取つて眺めてみる。

くわえた部分には、軽く歯型が付いていた。

「……あーやばいなあ

口ごくわえて火を点ける。

そんなことで、欲情した。

ありえないけれど、それは紛れもない事実。
寝転がつたまま、煙草をふかす。

焦がれて、焦がれて、どうしようもなくて。

体に疼いた欲を紛らわすように、白い煙が、薄汚れた天井へと消えて行つた。

暫くして、ラジアちゃんが戻つて來た。

「まだ寝てなかつたの？」

少し驚いて俺を見つめる。

「待つてたの」

「うんつて言つてたじゃん」

「やうだけど、待つてたんだ」

ふつと小さく零して、ラジアちゃんはベッドに腰掛けた。

俺はいそいそと起き上がる。

手荒く髪を拭く彼女から布巾を取り上げて、まだ濡れたその朱を丁寧に拭いた。

「綺麗だよね」

「リザの銀髪の方が綺麗だよ」

その一言は、狡かつた。

気付けば押し倒していた。

体力だけなら、俺の方が上。

魔力を使われたら吹っ飛ばされるけれど。

実際、何度も吹っ飛ばされたけれど。

水を僅かに含んだ朱は深紅となつて、安いベッドに散らばった。

「してもいい?」

「約束は?」

「……しても、いい?」

ラジアちゃんは何も言わなかつた。

ただ、俺を見つめていた。

表情一つ変えることなく、ただ、見つめていた。

それがひどく、切なく胸を抉る。

胸元をはだけさせ、その白い肌に吸いついて、きつく、朱い花を咲かせて見せる。

駄目だ。

ごめん。

ごめんなさい。

三つ程咲かせて、俺は隣に寝転んだ。

「……」めんね

「これまでして謝るなんて、どれだけ俺は狡いんだろう。

「やっぱり娼館に行けばよかつたじやない」

「……大好き」

「これまでしてそんな言葉を口にして、どれだけ俺は卑怯なんだろう。だけど、それでも。

「……知ってるよ」

ラジアちゃんは俺を抱き締めたまま、小むしゃぶりした。
その感触は柔くて、抱き締める力も柔くて。
していないのに、何だか満足した。

今は届かないけれど、いつか届く日が来るのだろうか。
来ないまま俺は消えるかもしれないけれど、傍にいていいだろうか。
俺の夢をラジアちゃんは叶えてくれるだろうか。

今は、どちらでもいい。

抱き締め返したら、ラジアちゃんが笑った気がした。

それがまたものすごく嬉しかったから、ラジアちゃんの胸に顔を埋

めて、俺は擦り寄る様にして田を閉じた。

それでも、ねえラジアちゃん。

やっぱり、きっとずっと、貴女しか見えないんだ。

2 1 sideラジア

あたしはしかめ面だつた。
それはもつ、この世で一番見たくないものを見たといつよつな顔だつたに違ひない。

さつきまでは「機嫌だつた。

旅の途中に立ち寄つたこの国は、とにかく飯が美味しい。

昼飯を食べるつもりで適当に立ち寄つたこの食堂も、味付けが素晴らしい。

らしい。

「美味しい！」

「うん、美味しいー」

そんな会話をリザとしながら、卓上に所狭しと注文した品々を堪能していた。

最高、久々に気分がいい。

そんな感じで至極「機嫌に、あたしがエビフライを口に放り込もうとした時だった。

「探しましたよ、ラジア・ゼルダ」

聞き覚えのある声に、あたしは箸を止めたのだ。

そして今に至る。

田の前に、ニヒリと笑顔を湛える黒髪朱瞳の美麗貴公子。と、リザ。

リザが笑顔なのは、こつものことだけ。

「何で座つてんの？」

「貴女に用があるからですよ」

「あたしはない」

ぱっさりと切り捨てて、エビフライを頬張る。
さつきまでご機嫌だったのに。

何でこいつが。

最悪。

何でこいつが。

『『何でこいつが』って顔しますよ』

「わかつてゐなら、どつか行つて」

「ラジアちゃん、この人誰？」

押し問答をしていれば、リザが訝しげに、あたしに尋ねた。

そつか、リザは知らないんだつた。

ほんやりと思い至つて、さて何と答えるべきかと考えあぐねていれば。

「君が噂のリザ・レストル?」

先に、嘘くそい笑顔を湛えた紳士が、よくわからないことを口にした。

「噂の?」

何故があたしが聞き返す。

何だ、噂って。

「ええ、巷で噂ですよ。『あの』ラジア・ゼルダが、旅のお供に美青年を連れているってね」

『あの』?

失礼極まりない、どういう意味だ。

ますます不機嫌になりながら、尚もエビフライを頬張る。
美味いな。

鶏の唐揚げも行ってみようか。

そう思つて箸を伸ばした時、リザが少し冷ややかな声で言った。

「あんた、誰?」

リザがご機嫌斜めとは珍しい。

あたしが知る限り、人に冷たく当たつたところなど見たことはなかった。

何か気に障つたのだろうか。

まあ、どうでもいい。

あたしは唐揚げを頬張りながら、その状態を放置することにした。

「ああ、失礼したね。私はルシア・アズガルド。ラジアの昔の恋人だよ」

すこぶる笑顔で、ルシアは面白くもないどんでもない冗談を言った。リザの眉が跳ねたのが、視界の端を擦る。

勘弁してくれ。

大人しく用件だけを聞いておけばよかつたと、小さく吐息した。どちらにしろ、面倒なことには変わりないかもしけないが。

「本当なの？ラジアちゃん」

笑顔だけれど笑顔じゃない笑顔をあたしに向けて、リザが問う。本当に堪るか。

「違ひよ」

「照れてるんですね。相変わらずだなあ」

ああもう、黙れ。

この場で吹っ飛ばしてやりたいのをぐつと堪えて、かちや、と箸をテーブルに置いた。

眉間の皺はそのままに、深く溜め息を吐く。

「……で？用つて何」

それを聞くまでルシアは席を立たないだらう。
昔から、そういう奴だった。

「裏です」

その言葉に、あたしではなくリザが眉をしかめた。

『裏』。

知る者ぞ知る呑こ言葉、そしてあたしの本職。

「ヨリでは何ですよね。私の屋敷に部屋を用意しましょ。場所は……知っていますね、変わってませんから」

あたしを見てそう言うとルシアは席を立ち、薄らと嫌な笑みを残してから、食堂を後にした。

知らなければよかつたとは、言ひだけ無駄なので口にせず。

美麗貴公子は消えたが、美麗剣士はまだそこにいた。

当たり前だけれど……取り敢えず視線が痛い。

「……何？」

聞くだけ聞いてみる。

「……恋人、なの？」

「だから違うって」

「……ほんとに？」

子犬の様な目で、その蒼い瞳があたしを見つめていた。

そういうのは困る。

溜め息しか出て来ない。

「俺、ラジアちゃんが好きだよ」

「……」で何でそうなる。

意味がわからないし、溜め息の数が増えるばかりだ。

「結婚しても、傍に置いてね。愛人でいいから」

子犬の瞳をしたリザの余りに容貌と不似合いな発言にがっくつとうなだれて。

あたしは、唐揚げを黙々と食べ続けることとした。

刻は夕暮れ。

穏やかな気候のこの国の穏やかな風が、あたしの朱い髪をふわりと巻き上げる。

目の前には、昔と変わらないやたら豪華な洋館。

いろいろと面倒な予感。

さつきの一件以来、リザはやたらとくつついて来る。

あたしよりだいぶ背の高いリザは、背中越しに抱き付いたまま離れない。

とにかく歩きにくくて、やっぱり溜め息が零れた。

「何なわけ？」

「俺、大きくなつたでしょ」「なつたけど」

だから、何。

大きくならなければ逆に問題である。

人間なのだから、成長するのは当たり前だ。

リザの言いたいことが掴めずに、あたしは首を捻った。

ちゅ。

途端、リザの口付けが、そこに落とされた。
首筋が無防備になっていたらしい。

軽く睨みてはみたものの、効果は期待出来ない。

「何してんの、勝手に」
「俺がしたかったのー」

耳元を心地良い声が掠める。

リザは男にしてみれば、そんなに低い声ではない。

世に言う『甘い声』ってやつだと思う。

「発情してんの？ 媚館行く？」

あたしの提案にリザは少し不貞腐れた顔をしたが、何がそんなに面白くないのかわからない。

面倒くさい奴だな。

放つておこう。

そう決めて、あたしはやたらと大きな扉に手を掛けた。

ぱちいつ。

小さく閃光が走り、思わず顔をしかめる。

生意氣に呪が掛かっていた。

人を呼び出しておいて、どういつ待遇なのか。
気に入らない、本当にあいつは何から何まで気に入らない。
わざわざ出向いてやつたといふのに。

まあ、あたしにしてみれば大した呪じゃない。

無理矢理こじ開ければ、ぱちぱちっと、静電気の様な音と小さな閃光が再び走った。

「無理矢理やつたでしょ」

リザが背中越しに言つ。

いい加減退いてくれないだろうか。

そんなことを思いながら、答えないままに足を進めた。

館の扉の呪も無理矢理こじ開け、迷うことなくルシアの血室に向かうあたしに、リザの訝しげな言葉が耳を擦る。

「来たことあるの？」

またもや答えず、代わりに眉間に刻んだ皺を濃くした。

よつやく、ルシアの血室前に立つ。

気配があるといふことせ、中にいるのだらう。

「むかつく」

部屋の扉を前に、思わず吐き捨てる。

何でたかが自室に、こんなに高度な呪が掛かってるんだ。^{じゅ}

吹っ飛ばしてやってもいいが、奴のことだ。

間違いなく賠償金を請求される。

しかも、事外に高額を。

それは悔しい。

「リザ、^の退いて」

リザはあつたり手を離した。

あたしのやるべきことを理解したのだろう。

いつも時は聞き分けがいい。

印を組めば、目の前に魔法陣が小さく浮かぶ。魔力を集中し、片手でそれを扉に叩きつけた。

魔法陣が光の粒となり弾け飛ぶと、音もなく呪は消し飛んだ。

「そんなに高度な呪だつたの？」

再度あたしに抱きついて、リザが不思議そうにドアを見つめる。

リザには魔力がない。

拾った時から、全くなかつた。
だからわからないのだ。

「むかつくほどに高度なやつよ。……あたしを試してる」

気に入らない、このあたしを試すだなんて。
これから多分、依頼をされる。
だからルシアは依頼主。
依頼主でなければ、ぶち殺す。

そう心に決めて、あたしは扉を無遠慮に開いた。

「流石ですね、ラジア」

部屋に入れれば、ルシアは豪華なソファに身を沈めていた。

「むかつくのよ、昔から」
「貴女がいけないんですよ」

「は、あたし？」

「……」じりと微笑むルシアの言葉に、思わず聞き返す。眉根を寄せて考えてみるが、何のことだかわからない。

「……わかりませんか。相変わらず鈍いんですね」

相変わらず腹立たしいですね。

思つたけれど、飲み込んだ。

埒があかないことなど最初からわかつている。

「仕事の話でしょう」

向かいのソファにびかっと腰を下ろす。リザも隣に座つてから、あたしの腕に、また抱きついてきた。
……もう、何も言つまー。

「やたらと懷いてますね」

「俺はラジアちゃんのものだもん」

そうだったか？

リザの言葉に、あたしは首を捻った。

煙草に火を点け、一人を見やる。

笑顔こそお互いに絶やさないが、何故か睨みをきかせていた。が、それこそ口にするだけ面倒な気がして、見て見ぬ振りをする。美形一人が、何とももつたいないことだ。

どうでもいいことを考えて、あたしは苦笑した。

「まあ、いいでしょう。そう、仕事の依頼をしたいんです」

穏やかに言つて、あたしに向き直るルシア。

「内容と報酬は？」

「もうお金の話ですか」

「大好きなの」

「こうりと笑顔で答えた。

「そうでしたね。ではまず、報酬から」

ルシアは立ち上がり、後ろの豪奢な机の引き出しから、白い小袋を取り出す。

それがあたしの前の硝子テーブルの上に置いた。

じゃらりとこいつ音に、口角を上げる。

この面に勝るものがあるかと問われたなら、ないと断言出来るに違いない。

「確認して下やー」

言われなくともだ。

中身を見て、奥を搔き回す。

そしてあたしは 思わず顔をしかめた。

「……内容は？」

面倒なことになりそうだ。

予感は当たった。

中身は全て、金貨。

豪邸三軒は購入出来そうな大金である。

「玩具を手に入れたいんですね」

「玩具……？」

そう言って細められた朱い瞳に、あたしは、この上ない嫌悪感を抱いた。

「ラジアちゃんは、ものすごく嫌悪感を顕にしつつも、依頼を受けた。

ベッド脇の棚上には、さつきの小袋。

金貨が詰まっているのを俺も見ている。

荷物袋に入れない辺り、表面上、受けただけかな。

そう思つた。

ラジアちゃんはお金がとにかく大好き。
だから、こんな不用心に棚に置いておいたりしない。
速攻でしまうか、絶対に離さないとばかりに手に持つているかが普通だ。

「しまわないの？」

「んー……」

俺の膝の上で、ラジアちゃんは顔をしかめた。

珍しいことに、俺は今、ラジアちゃんに膝枕をしている。
膝枕 자체が珍しいわけじゃない。

普段は俺がしてもらっている。

だって、くつづいていたいから。

珍しいのは、ラジアちゃんに膝枕をしているという現状。

「どうしたの？」

「んー……」

「さつきから、 そばっかりだね」

朱い綺麗な髪を梳きながら、思わず笑顔になる。
指通りのいい、長い髪。

俺の普段からの手入れの賜物だと思つ。

ラジアちゃんはとにかく、外見に無頓着だ。

センスは悪くないし、寧ろいい方だとも思つ。
ただ、髪とか肌とか、そういうた女子なら気にするべきといふて
対して、全く関心が無い。

もつたいないと思つけれど、それを気に掛け手入れをするのは、自分だと勝手に思つてるので言わない。

あの男も、ラジアちゃんが好きなのだろうか。
出会った時の言動からさつきまでの会話を思い出して、それが確信
に近いことに知らず顔をしかめた。

「ねえ、ラジアちゃん」

「んー？」

「あの人、何であんな依頼したのかな?」

ルシアの依頼は最悪なものだった。

「『玩具』つて、お姫様のことだよね?」

「……そうだな

浮かない顔で、ラジアちゃんは短く答える。

ラジアちゃんの仕事は、裏魔術師。

普通の魔術師は、薬草を作ったり、占いをしたりして生計を立てている。

ラジアちゃんも出来るらしいけど、滅多にしない。

理由は『お金にならないから』らしい。

大体、生活に必要なお金は、ラジアが賭け事で儲けたもので成り立つている。

ラジアちゃん本職の裏魔術師とは、相当な魔力と手腕、そして、信頼がないと出来ないらしい。

内容は主に、裏稼業と言われる類のもの。

殺人、誘拐、たまには国を滅ぼしたりもしたらしい。

詳しく述べられない。

少なくとも、俺が拾われてからは、そんな大層な仕事はしていなかつた。

精々、お金を巻き上げたり、誰かをとつちめたり、用心棒だつたり。それくらいのものだ。

「あの人依頼、どうするの?」

聞いてみたかった。

どりするのか。

標的は一国のお姫様。

そのお姫様を誘拐して、ルシアの館に閉じ込める。
ルシアが死ぬまで、お姫様の肉体の時を止めて、永遠に『玩具』に
したいらしい。

肉体の時を止める。

それは、ラジアちゃんほどの魔力がないと出来ないことだ。

そしてそれは俺の夢。

「どうするの？」

瞼は閉じられたまま、黒い瞳は見えない。

僅か寄せられた眉根だけが、ラジアちゃんの心情を物語ついていた。

「……お姫様次第、かな。ルシアとは面識があるらしいから

「……そつか」

答えたラジアちゃんは、何故か悲しそうに見えた。

理由なんて俺には、わかるようでもわからないに等しいけれど。

「何でそんなことするのかな？」

「……永い時を生きるから、だろ」

ルシアも魔術師なのか。
何だか納得したけれど。
けれど。

田を開けたラジアちゃんはものすごく切ない顔をしていて、その黒い夜色の瞳で、俺を見つめていた。

髪を梳く手が止まる。

時間も、気持ちも、俺には余裕なんてない。

永い時を生きるから、『玩具』が欲しいとルシアは言った。

多分、やり方はどうであれ、ラジアちゃんにはその気持ちがわかるんだと思う。
同じだから。
同じなんだ。
だから、俺を育てた。
俺だったのは、偶然だと思つけれど。

「俺も……」
「リザは『玩具』じゃないよ」

俺の言葉を遮つて、ラジアちゃんは優しく笑つた。

狡いよ。

それはわざと、嬉しい言葉。
だけどきっと、悲しい言葉。

それでもいいんだなんて、そこまで言えば、わざと、ラジアちゃんに嫌われる。

きゅ、と唇を結んで、優しくも切ない笑顔をただ、何とも言えないままに見下ろした。

俺の夢は、やつぱり叶わないみたいだ。

知っていた、けれど。

ねえ、大好きなんだ。
大好きなんだよ。

口をついて出そうになる言葉を飲み込む。
今夜はきっと、言わない方がいい。

「……一緒に寝ようか」

素直に驚いた。

今日は珍しいことばかりだ。

「普段は嫌がるの？」
「たまにはね」

綺麗に笑んで、俺を見つめる。

「……だから、それは狡いよ」

「何のこと?」

答えてなんかあげない。

ただ、口から知らず零れたのは、俺の素直な欲望だけ。

「やつちゅうやつよ。」

「……いこよ」

感傷的になつてゐるのかな。

そう思つた。

俺にはわからない気持ちだから、何とも言えない。

何とも言えないけれど、やっぱり、そんなんは狡いんだと思つた。

して欲しこと望むことは何だつてしてあげる。

俺は、ラジアちゃんのものだから。

あの時からずっと、貴女だけのものだから。

「優しくするね」

「リザが優しくしなかつたことなんてないよ。」

あまりに切なく笑うから、俺も切なくなつた。

身を屈めて、額に優しく口づけを落とす。

抱き抱えれば、ラジアちゃんは遠く視線を投げて笑つた。

俺じゃなくて。

でも、いいんだ。

俺だつて今、つけ込もうとしているから。

貴女のその感傷に、入り込むだけの余地を探しているから。

闇の中、その柔い唇に口づける。

深く味わつてから離せば、細い銀の糸が一人を繋いだ。

ラジアちゃんの唇は久しぶり過ぎて、やたらと興奮した。

「ねえ、大好き」

「……うん」

「大好きだよ、ラジアちゃん」

「……うん」

言わないと決めたのに、意志の弱い俺は、何度も何度も囁いた。

優しくするよ。

何だつていいんだ。

手に入れたいわけじゃない。

手に入れて欲しいんだ。

明日の朝、多分、ラジアちゃんは後悔するのだと思う。

それをわかっていて、俺は、俺の世界の中心を愛おしんで、貪るように、慈しむように、つけるだけの隙間に全てを埋め込むようこそ抱いた。

ありえないことをしたとベッドの上で後悔をしていた。

朝日がやたらと眩しい。

隣を見やれば、見事な銀髪が煌めいている。

閉じた瞼は長い睫毛に縁取られ、それは精巧な人形のように美しかった。

穢してしまった気になつて、すぐに視線を逸らす。

そんな自分にまた、嫌になつた。

起これないようにひとつベッドから抜け出す。
スプリングが軋み、小さく音を立てた。

「あ

小さく声を漏らし、何も着ていないうことが、何とも情けなく思えた。

バスローブを羽織つて、無駄に大きな窓際へと足を運ぶ。

カーテンを締め忘れた窓を開け、椅子に腰掛け煙草に火を点けた。

「……はあ

溜め息が出る。

白い煙はゆらゆらと、行く先もなく消えて行った。

ああ、あたしみたいだ。

そんなことを思つた。

行く先もなく、ただ、ゆらゆらと。

永い時を彷徨つて。

「ぐだらない」

あの時、あたしも消えてしまえばよかつたのに。
あの、朱い月の夜に。

「……ぐだらないな

そんな思考 자체、ぐだらない。

どうせ死ねはしない。

他人に殺^やられるなんて、あたしは御免だ。

あたしの人生はあたしで幕を引く。

あの時から、そう決めているのだから。

「……んー……」
「起きたか」

後ろのベッドでリザが軽く唸る。

振り向くことなくあたしは咳きを繰りして、一吐きした煙で、少しだけ田を細めた。

「…………おはよひ、ラジアちゃん…………」

のそのやとリザが起き上がる。

眠そうに瞼を二三度ながら隣まで来ると、床に座つてあたしの膝に頭を乗せた。

煙草をふかしながら、その銀髪を軽く撫でてやる。

「昨日は、『めんな

リザはこいつと笑つただけだった。
多分、わかっているのだ。

「俺、優しく出来てた?
…………優しかったよ

優しかった。

痛いくらいに、優しかった。

だから切なかつた。

あたしに向ける瞳が。
あたしに触れる手が。
あたしに触れる唇が。

应えられない、その想いが。

痛いくらいに優しくて、様々な感覚に溺れでは、ふとした一瞬に、
泣きたくなるほどに。

「……ごめんな」

あたしは謝るしか出来ない。

どんなにそれが狡いことでも、それがまたリザを傷つけるだけであ
るうと。

感傷を紛らわすために、リザの気持ちを利用したのはあたしなのだ
から。

「ううん、いいよ。わかってるから」

気持ちよさで口を開じて、リザはあたしの腰に手を回した。

「……いつか、
「うん?」

聞こえなかつた。

顔を寄せて、その端正な顔を見つめる。

「……何でもない」

「……そう」

聞かない方がいいのかもしれない。
そんな気が、した。

窓の外を眺めれば、微かな風が煙を攫う。
あたしの頬を掠めて行く。
少しだけ、

「……リザに救われたんだよ」

そう、少しだけ。

軽く額に口づけて、あたしはリザに微笑んだ。

ルシアの家で出された朝飯も早々に済ませ、あたし達は街に出た。氣を遣つて出してくれたというより、あの朝食の場はあたしに対する嫌がらせとしか思えなかつたから……というのが大いにあるが。あいつの気に食わない顔を見てられなかつたし、何はともあれ、情

報が必要だった。

「何で気づかなかつたかなーあたし」

溜め息混じりに咳いて、辺りを見回した。

ラグト国中央都市ハシルス。

東にジラート荒野、南にメメンテ砂漠、北にエンド山脈を持つこの国は、中央から北に掛けて発展しており、その地域に王族や貴族が密集して住んでいる。

ルシアがいる街だとわかつていたら、絶対来なかつた。

しかしながら、あたしは地名を覚えることが苦手だ。

この国のことではさえ、たつた今思い出したばかりで、いつか滅びるだろう国をわざわざ覚えようとこつ『氣』がない。

「何年ぶりくらいなの?」

「んー……百五十年くらい?」

リザがあからさまに驚くので、何とも言えない気持ちになつた。

「……聞いたことなかつたけど、ラジアちゃんて何年生きてるの?」

『何歳なの』と聞かなかつたのは、リザなりの配慮だろうか。結局は同じなのだが。

「……忘了た」

忘了たよ。

百五十年前のことから、ついやへ思へ出したの。

少なくとも、その頃ルシアは、この国の王都専属魔術師だったことは確かだが。

「そつかー。まあ、それだけ経つてたらわからんないよ。街並み、変わったんじゃないのかな」

リザの言葉に、あたしは納得した。

そうか、変わったのか。

ルシアも、街並みでさえ、変わつて行くのか。

あたしを置いて。

あたしだけが変われないような。

「俺は変わらないよ」

「え？」

「変わらないから」

「うう」と笑つて、そのままリザは前を向いた。

リザは時々、ものすごく鋭い。

見透かされたようで、ぎくつとした。

変わらないはずない。

変わらないものなんてない。

リザは歳を取つて行く。

その内誰かと結ばれて、子を残して、老い、土に還つて行く。

それはあたしより早く、あたしより確実に。

「リザはもう一人前？」

「ラジアちゃんは、何で答えて欲しい？」

「……何て、か」

自分で聞いたくせに曖昧な返答をして、あたしは苦笑する。
リザはただ、笑っていた。
ふいに一陣、風が吹く。

ほんの数センチにも満たないあたしとリザの間を、掠めて、通り過ぎた。

「そうか。

そうだった。

これが、あたし達の距離だった。

曖昧に濁したその先なんて、最初から、わかっていたのに。

賑やかな街の喧騒が、あたしの気持ちを攪つていった。

「ねえ、ビーム行くの？」

「ねえ、ビーム行くの？」

はつと我に返つて、勢い良くリザを見る。

何を今さらなことに感傷的になつていいたのだろう。

「ビームしたの？」

「……いや、何でもないよ」

何で聞かれたつけ……まるで聞いていなかつた。

「ビーム、行くの？」

そう、それだつた。

「昔からの馴染みに

「男？」

リザが嫌そうな顔をしたので、ルシアの時を思い浮かべて苦笑する。
相当あいつはお気に召さなかつたらしい。
それはそうだ。

あたしだって、あいつは気に入らない。

「女だよ」

目に見えて安堵したリザに、あたしはまた、笑った。

少しばかり遠いので、魔術の短縮詠唱をしてぱちんと指を鳴らす。次の瞬間、目の前の景色はがらりと変わった。

「すごい、転移術？」

「そう。あんたと二人なら大したことないしね」

これが詠唱なしで大人数なら、あたしは間違いなく倒れているだろうが。

「どれくらい離れてたの？」

「だいたい街三つ四つくらいじゃない？」^{ここはラグトの東端、ワーカー街だった……かな}

ハシルスの如何にも中央都市的な小綺麗豪奢な屋敷達は見当たらず、大通りには色とりどりなテントが市場バザールを彩り賑やかだ。ジラート荒野とメンメンテ砂漠に隣接する街だけあって、乾いた空氣の中、土氣色のレンガ造りの家が目立つ。

あたしの記憶が確かなら、目的地は裏通り。

朝だというのにそこは、やたらと薄暗かつた。

くたびれた赤茶の看板に寂れた扉は、勢い良く開けたらそのまま外れそうだ。

扉にはまた呪が掛けである。

この国は意外と物騒なのだろうか。

バチバチッと音を立てて、あたしは扉を開けた。

「無理矢理はお止しよ」

真夜中かと思わせる深い闇の奥から、声がした。
あたしは掌に灯りを出現させ、気にせず奥へと向かつ。
その後を目を細めながらリザが付いて来た。

「久しぶりね、ビーチエ」

声の主の元まで行き、あたしは笑顔で、そう言つ。

「……老けた？」

首を傾げ、ビーチエを覗き込む。

暫く見なかつた彼女の目尻には、だいぶ皺が増えたように思えた。

「失礼な。あたしはあんた程 魔力がないんだよ」

「……お婆さん？」

暗がりに目が慣れたのか、リザはあたしの横に立ちビーチェを眺めた。

その顔はきょとんとしている。

「ふうん、これが噂のあんたの連れかい」

だから何なの、その噂。

あからさまに顔をしかめたあたしを気にせず、ビーチェはリザに問い合わせる。

「名前は？」

「あ、リザです。リザ・レストル。ラジアちゃんが付けてくれたの」「そうかい、いい名前だ。あたしはビーチェ・カザリ。よろしくね、リザ」

名前を誉められたのが嬉しかったのか、リザはすこぶるいい笑顔で応えた。

「じゃ、必要事項をぱぱっと教えて。あ、簡潔にね」

ビーチュの前の小さな椅子に腰掛け、あたしは煙草をくわえる。

「用件も言わないのかい」

「あたしが来ることも、用件も、貴女はわかつていたはずよ」

「まあねえ」

にやりと笑んだビーチュを横目で見やり、火を点ける。

引き出しからやたら大きな水晶を出すと、ビーチュは卓上の布の上にゆっくりとそれを置いた。

リザは黙つて、興味深そうにそれを見ている。

随分ゆっくりと時間が流れた気がする。

あたしは煙草をふかしながら、リザはわくわくと水晶を見つめながら。

ビーチュの伏せられたその目が開くのを、ただ、待っていた。

何度もかの煙を吐いた時、その目が静かに開かるのを見留めた。

「灰を落とすんじゃないよ

「綺麗にしてくわ」

ぱちんと指を鳴らせば、煙草も灰も一瞬で消え失せる。多分、近くの灰皿へとでも移動しただろう。

「詠唱もなしがい」

「当たり前でしょ。あたしを誰だと思つてんの」

「流石はラジア・ゼルダ。その名を伝説にするだけあるんで？」

さつさと先を促す。

あたしが聞きたいのは、どうでもいい伝説云々じゃない。

「見てみな」

ビーチェが水晶を指差す。

そこには、金髪紫瞳の女の子が映つていた。

年の頃は十七、八。

その顔立ちに、あたしは何となく見覚えがあった。

「んー？」

眉根をひそめて、ぐぐっと水晶に寄る。

何だつたろう。

誰だつたろう。

あたしは、知つている。

「……あ」

あたしと同じく考えていたらしいリザが、先に声を上げた。あたしはまだわからず、首を捻つたまま、リザを見ている。

「……この人って、例のお姫様？」

「そうだよ、ルシアの目的を」

そんなことはわかっている。

リザとビーチュのやりとりを眺めながら、舌打ちをした。

そうじやなくて。

苛々と眉根を寄せたあたしを、リザがじっと見つめる。何故か、複雑な表情を浮かべて。

「ラジアちゃん……わからないの？」

「え？」

わかりそうでわからない。

少なくとも、この姫君と面識はないはずだ。

なのに、知っている気がするのは何故だろうか。

喉まで出掛かって、ひつひつしてしまった感じに似ている。

やつぱり考えてもわからなくて、早く言えと、視線で訴えた。

「……この姫様、ラジアちゃんに似てるんだよ……」

目を伏せて、リザは一言、そう呟いた。

その意味を計り兼ねて、水晶に視線を戻す。

「名前をアリア・リタリナ・ラグトリア。ラグト国第一姫君だ。目的は……言わなくてもわかるね」

アリア・リタリナ・ラグトリア。

この子がルシアの欲しがる『玩具』。

言わなくともわかる……？

ビーチュの言葉が、暗闇に静かに響いた。

私のものにはならない。
だから私は『玩具』で我慢するしかないのだ。

百五十年前、ラグト国中央都市ハシルス王城。

「ルシア様！」

小走りで駆けて来る女魔術師を見留めて、小さく溜め息を漏らした。
長く垂らした茶髪ブルネットが小刻みに揺れている。

形容するとしたらつぶらであるつ翡翠の瞳に、私はどのように映
つているのか。

考えるまでもなく、目の前まで来たその女が嬉しげに笑って見せた
ので、また込み上げた溜め息を何とか押し戻した。

「どうしました？」

望むままに応えてやればいい、ただそれだけだ。

人好きしそうな紳士的笑顔を貼りつければ、案の定、彼女の頬が薄
らと染まった。

一瞬睫毛は伏せられ、そのまま上田遣に変換された媚びに、吐き気がする。

誰だったか 私が思考していることすら、考へ及んでしゃえないだろ。

「あ、あの…わたくし、レンシア・ドリスと申します。お、覚えておこでしょうかー？」

「…あ、愛称はミリーだったかな」

一度講師として出席した王都専属魔術師見習いの講習で、彼女の班を担当したのだったか。

器用に高等障壁を作り出し、なかなかに素質があるよつて思えた彼女を誰かがそう呼んでいた。

よつやく思に至つたことは、もちろん、微塵も出せない。

「やつぱり覚えていてくださったんですね！」

「わざわざですか？」

「やつぱり」と口にする辺り、浅ましさが垣間見える。

つぶらながらも妙な自信を宿した瞳にて、私の真実は映つていないのである。

映してやつとも思わないが。

私の腹の中など知らないレンシアは、舞い上がったのか、つらつらと楽しげに話しだしていった。

「今度あの『生ける伝説』の講習会に出席出来ることになったんです！嬉しいで、ルシア様にぜひ報告をthoughtして…」

『生ける伝説』の。

噂は裏稼業の世界のみならず表世界にまで名を馳せ、生きていて尚『伝説』と呼ばれる裏魔術師……ラジア・ゼルダ。

「ルシア様のご教授の賜物で、あの講習会以来、わたくし、ずいぶんと認められるようになつたんです！やつぱりルシア様の見る目は間違いないと申しますが、ルシア様付き見習いになつてはどうかといつお話もあります……」

ミレンツィアの話は、全く聞こえていなかつた。
媚びた上目遣いも気にならなかつた。

『生ける伝説』である裏魔術師が、この国に来る。

彼女がどうじつた理由でつまらない講習会などやる氣になつたのかは知らないが、二つ名が本当であれば、それなりに私を楽しませてくれるに違いない。

少なくとも、ここの人達よりはよほど期待出来るだろ？。

私はつまらないのだ。

永きを生き、大抵のものを見て大抵のものは手に入れて、大抵の者達は私を敬い、誉めそやし、崇め、そして憧れ、女という女は隙さ

えあらばと媚びて来る。

それはまた、男であつてもだ。

何も知らず、知ろうともせずに。

王都専属最上級魔術師の肩書きと容姿や上辺だけに騙されて。

私はくだらないのだ。

果てるはずだつた時を自ら冒してしまつたあの時から　全てが色褪せてしまつたのだ。

白い大理石の豪奢な細工を施した王城も、発展しつつあるこの国も、美しく才溢れるミレンツィアも……私には輝いて見えない。

「講習会ですか……私も参加しましょう」

「まあ、嬉しいですわ！」

何を勘違いしたのか、また頬を染めたミレンツィアが笑つた。
どうでもよく、ただ、笑みを貼りつけた。

肩書きが功を奏したのか、私の参加はあつさりと受理された。
数日後には、噂の講師との懇談会と称した立食会にまで招かれる始末だ。

「『伝説』の裏魔術師か」

今ではすっかり馴染んだ自室で革のソファに腰を沈め、知らず口元は弧を描く。

ラジア・ゼルダ　彼女はこの国の違和感に気づくだろうか。
二つ名に恥じないだけの観察眼を見せてくれるだろうか。

いや……過度な期待はやめておこう。

彼女とて人間であることは違いない。

ただ、その能力が常人のみならず魔術師としても、桁外れなだけなのだから。

たったそれだけの違いが、私達には大き過ぎる代償でもあるのだが。

それでも、私の期待は膨らむばかりだった。

口に含んだワインが、久しぶりに美味であると感じるほどだ。

「ルシア様、探しましたわ！」

懇談会当日。

会場に入つてみたら、田舎者とミレンツィアが駆け寄つて来た。
ミレンツィアのみならず、すでに幾多の顔見知りかどうかさえ疑わ
しい者達に囲まれ、開場前だというのに、すでにうんざりせざるを
得ない。

「最上級魔術師の正装がとてもお似合いですわ」

「紺色のベルベットに金糸の刺繡が髪と瞳に映えて、流石はルシア
様ですわね！」

「気品が漂っていますなあ」

「いつもとそんなに変わりませんよ」

寧ろ、膝まであるジャケットが鬱陶しいくらいだ。

何が「髪と瞳に映えて」だ。

黒髪短髪などそう珍しくもないし、朱瞳に限つては「血の色だ」と嘆う者さえいることを知らないとも思つていいのだろうか。女達はともかく、年配の取り巻きの男達に限つては、腹の中でどう思つているかなどわからないものだ。

つづづく、人間とは恐ろしい。

そこまで考えて鼻で笑つたところで、ようやく、開場時間になつたようだ。

壇上に上がつた本日の司会役が、声帯拡張術までわざわざ施行し、嘘臭い笑顔で挨拶を始める。

「本日はお忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。では、早速ご紹介いたしましょう。今回の講習会特別講師『生きる伝説』と謳われるこの方ですーラジア・ゼルダ殿ー」

わあつと会場が沸く。

が、

「……出て来ませんね？」

ミレンツィアが首を傾げるのも当然。

名を呼ばれたにも関わらず、ラジア・ゼルダは壇上に現れなかつた。

「ゼ、ゼルダ殿……！？」

慌てふためく司会に被つて、舞台袖からは何故か、揉めるよつな会話が途切れ途切れ聞こえてくる。

会場中ほどにいる私には、あまり聞き取れないが。

「ちょっと、呼ばれてんだから早く行きなさいよ。」

「嫌だね。だいたい何でこんな……」

「承諾したでしょーーー！？」

「あたしが知らないうち、あんたが勝手に……！」

どんづ、と押されたよう、彼女はようやく登場を果たした。

空気が変わる。

わあつとまた、会場が沸く。

嫌そうに軽く会釈をしただけの彼女に、また、会場は沸いた。

「美女だと聞いていましたけれど、大したことないですね。わたしの方がよっぽど……ねえ、ルシア様？……ルシア様？」

ミーンツィアの言葉はやはり、私の耳を素通りしていった。

朱い髪、夜色の勝気な瞳。

どこか、孤高であり孤独が何たるかを理解しているかのよつなか。

あの、人を寄せつけない雰囲気。
私と同じ色を持ち、私以上の魔力を持つ女。

「……初めてだ」

「え？」

グラスを二つ手にした。

何か言おうとしたミレンツィアを残して、私の足は彼女へと向かっていた。

求めていた運命との出会いに、感じたことのない胸の高鳴りを感じて。

「初めまして」

「あん？」

群がる者達を堂々と蹴散らして、彼女は肉を貪り食っていた。
骨つき肉にかぶりつきながら振り向いたその夜色に、完璧な笑みを浮かべた自分が映り込む。

ぞくりと、背筋が震えた。

自分以上の魔力に対しての畏怖か、はたまた、これを情欲と呼ぶのか。

どちらも感じる環境になかったので、私にはわからなかった。

こんな状況での対面にそんなことを感じた自分に、初めて、可笑し

くて笑いさえ込み上げたのだ。

「飲みませんか？ラグト産の砂漠酒はなかなかいけますよ
「砂漠酒？」

笑つてしまつている私など氣にもせず、彼女の興味はグラスの中身に釘づけになつてゐる。

それがまた、私には嬉しかつた。

「メメンテ砂漠のオアシス水を濾過して、現地でしか取れないガジュの実を漬け込んだ酒です。魔術職人が造つてゐるので、なかなかに高価だそうですよ」

「砂漠で造つてんの？」

「ええ、そうです」

ふうん、と言つてグラスを受け取つた彼女は、一気にそれを飲み干す。

「美味しい！おかわり！」
「お持ちしますよ、ゼルダ殿」

途端、むつとした顔が間近にあつた。
襟首を掴まれたのだと認識するのに、数秒を要する。

「ラジア」

「……え？」

「ラジアでいいわ」

呼び方が気に入らなかつたのか。

「……私はルシア・アズガルド。ルシア、と」

夜色の中の私は、別人のように、素直に笑つていた。

彼女との時間は驚くほど早く過ぎていった。
永く永い時に囚われ、遂には自ら飛び込んでいった私が言つのも可
笑しいが、それだけは確かだつた。
さして表情をえることない彼女ではあつたが、美味しいものを食べ、
金について語る時だけは、夜色の瞳に嬉々とした光が宿ることもわ
かつた。

人は彼女を「がめつ」とさえ言つだらう。
現にその要素は充分にある。

しかし、それを上回るだけの要素が、私を捉えて離さなかつた。

私以上の魔力と、一切感じない媚び。

ミレンツィアは大したことがないと断言したが、私と同じ朱と黒を持つ彼女は、私の目には美しく映つていた。
興味えないような冷めた目に、啼かせてみたいといつ思いさえ湧
き上がつてくる。

「そう　啼かせてみたい、」この腕の中で。

私以上の力を持つ彼女を、私の力で屈服させてみたい。

「やつこえぱ、」

よからぬ思いを察したのかどうか、彼女はふと、口を開いた。伸ばした手をそっと握る。

「…………どうかしましたか？」

「この国、何で幻術なんか掛けてあるの？」

氣づいていた。

今まで誰も氣づかなかつたそれに、初日から彼女は氣づいていた。

ぞくぞく、と感動で肌が粟立つのを感じた。

「幻術、ですか」

「氣づいてたでしょ」

冷めた目が、私を見据えていた。
その中に、打ち震える私を映して。

「これだけの大規模な幻術、施行出来るのはあんたしかいないと見
たけど 違う? ルシア」

ああ、運命とは本当にあったのだ。

「ルシア……! ?」

「やつと効いてきましたね」

ぐら、と傾いたその体をやんわりと受け止めて、そつと、会場を抜けた。

この屋敷を『自らの』ものだと認識するのに、どれほどの時を費や
したであろうか。

私を『ルシア・アズガルド』であると認識するのと、同等の時であ
ったように思う。

ラジアをソファに横たえ、その両手に封魔の錠を掛けた。

「悪く思わないでください」

その言語に反応するよう、元気と顔が動く。

意識はあるのか。

「眠られたかと思つていきましたよ
「ふざけんな……」

盛った睡眠薬はかなりのもの。

常人ならずとも、上級魔術師であるうと、まる一寸は目覚めることがない代物だということに、やはり彼女は大したものだ。

ただ、

「それで精一杯のようですね」

おとなしく錠を掛けられた辺り、身動きは取れないらしい。
案の定、悔しげに唸つた程度で、小さく溜め息を漏らしたきり、黙つてしまつた。

これで彼女は私のもの。

無意識に笑みを湛えた自分が、夜色の中に映つていた。

「退屈がせるつもつはありませんが、一つ、昔話をしてくれあげま
じゅつ

ボトムを留める腰紐にするりと指を挿し込み、それをゆっくり解き

ながら、片手で滑らかな皮膚を楽しむ。彼女は何も言わなかつた。

「今からそう……何十年前でしたか。百年はいかない程度の昔ですよ。この国に、一人の魔術師がやつて來たんです」

「……」

腰紐を解き、その指がするりと白い腹部を撫で上げる。

「その魔術師は大層な魔力を持つていたんですが、残念なことに、魔力消費型でした」

「……っ！」

胸に到達するかしないかの辺りで、華奢な体が反応を見せる。話に反応したのか、はたまた、そこが悦ぶ場所だったのか。

「『存知でしょう。魔力ある者は、食物摂取や休息により魔力回復をし、いつまでも若々しいられる持続型と、使用する』とに魔力を消費し、回復することなく老いていく消費型がいます。貴女はまさに前者だ。　その魔術師は精力を吸い取ることで永らえていたんですが、自らの老化した容姿をとても憎んでいました。人の精力など、吸収したところでたかが知れています。精精、保つて十年程度ですからね。結局は老いてゆく」

老いには逆らえない。

人は皆、そうして死んでいく生き物だ。

耳元をなびりそのまま舌を這わせれば、びくりと面白い反応を見せた。

「ああ、耳が善いんですね。……そうそう、魔術師の話でした。ある日その魔術師は、老いることのない容姿に発狂寸前の持続型魔術師に出会ったんです。彼の望みは、老いを恐れる魔術師とは、全く逆のものでした」

耳たぶを甘噛みし、囁くように続ける。
愛の告白ではない。

「魔術師はずつと、血らを若返らせるための研究を続けていました。そんな魔術師に、彼は言つたんです。『肉体を交換しないか』と」「！？」

敢えて彼女の瞳は見なかつた。

どんな顔をしていようと、それはきっと、私の望んだ顔ではない。

「術は施行されました。研究の成果あつて、成功したんです。魔術師は彼に、彼は魔術師になつたんですよ　！？」

ドガアアン！

一瞬、何が起きたのかわからなかつた。動かそうとした右腕が反応しなかつたことで、ようやく、自身が壁にのめり込んでいたことを知る。

もうもうと立ち上る煙の中、彼女は立つていた。

「……流石ですね」

「こんなもので、あたしを拘束出来るとでも？」

崩れゆく封魔の錠を一払いし、彼女の夜色が、しかと私を見留めていた。

「魔力を溜めていたわけですか」

なるほど、だから無抵抗だつた。

「答えて」

彼女の問いは、わかっていた。

私は私で在るために、自然の理を冒し、『私』で在つたことを放棄したのだ。

今の私で在るためこの国に莫大な幻術を施行し、そのために犠牲も

厭わなかつた。

私と『私』の関係を知る者、疑惑を持つ者、懸念する者、全ての者を礎に、この幻術は成り立つている。

私が私で在るために。

「貴方の　本当の『名』は?」

「私は　」

その『名』を知るのは、今でも、ラジアだけ。

あの時殺してくれたなら、私はもう、足搔くことさえなかつただろうか。

「あの青年を共にしたという噂を聞いた時の私の気持ちなど、永遠にわからぬのでしようね」

だからせめて、『玩具』だけでも、私の傍に。

2 4 sideルシア（後書き）

2011年1月7日更新完了。

ビーチュさんの所からの帰り道、ラジアちゃんはずつと無言だった。

複雑な顔をしていたけれど、多分それは、ルシアの気持ちを理解してのことじゃないと思う。

『何で』っていう顔だ。

ラジアちゃんは大概鈍い。

わかりやすく、わかつて欲しくてあからさまにしていた俺の気持ちにさえ、気付くのに随分掛かったほどだ。

ラジアちゃんは本当に鈍い。

それは、他人は愚か、自分にも執着していない何よりの証しのようで、気づくたび、俺はこわくなる。

そこまで考えて、本当にわくなつてふるつと首を振った。

あのお姫様は不憫だと思うけれど、俺はそんな他人より、誰よりもジアちゃんが大切だから。

ラジアちゃんの傍にいることが大切だから。

俺はルシアみたいに、誰かを代わりには、出来ないんだ。

「おひ、姉ちゃん。いい飲みっぷりだなー」

やんやんやんやと騒ぎ立てる人達の中心で、『じゅじゅ』と喉を鳴らしながら

がら、ラジアちゃんはひたすらに酒を煽っていた。

椅子に乗っかり、片足はテーブルに乗っけている。足下には無数に転がる酒瓶、卓上には山盛りになつた吸い殻と食べ散らかし。

「おう。兄ちゃんはあの姉ちゃんの連れかい？」

「そうー。豪快でかつこいいでしょー」

「違いねえ！」

負けじと豪快に笑つて、おじさんは俺の背中をぱしばしと叩いた。

もやもやするのかもしれない。

何が、なんて俺には計り知れなくて、掛ける言葉は見つからない。こんな気分の時、ラジアちゃんはいつも、浴びる程 酒を飲む。だからただ、ひたすらに傍にいて、飽きるまで付き合つしかないし、それが出来るのは今のところ自分しかいないと思つてこる。

同じテーブルにいるので、顔を上げれば田の前にはすらりと伸びた白い脚。

深くスリットの入ったスカートを穿いているから、太腿までが露わになつている。

「見えちゃうよー。」

一応、声を掛けてみる。
聞いてないだろ？けれど。

「何つ？よし、賭け事やるか！」

誰もそんなこと言つてないけれど……。

わーっと歓声が上がり、うやむやの内にカードゲームが始まる。
勿論、ラジアちゃんの一人勝ち。

たんまり稼いだお金を眺めて、にんまりしている。

「可愛いなあ」

「兄ちゃん、あの姉ちゃんの恋人かい」

おじさんの言葉に、目を剥いて驚いてしまった。

「……そう、見えるかな？」

「それ以外に見えねえよ！」

やばい。

もう、どうしよう。

顔が緩むのを必死に両手で押さえていれば、おじさんは豪快に笑つて、酒瓶を抱いでどこかへ行ってしまった。

「あ

気づけば、いつの間にかテーブルに突っ伏し寝入ってしまったラジアちゃんが目に映る。

それでも巻き上げたお金を離さないのは、いかにもラジアちゃんらしい。

凄いな、幾ら稼いだんだろう。

酔っ払っていても強いなんて、流石としか言いようがない。

「よいしょっと」

寝入ったラジアちゃんを背中に乗せて、勘定を済ませ外に出る。俺の肩に顔を乗せて、すりすりと気持ちよさげに寝息を立ててラジアちゃんを見た。

可愛い。

どうしよう。

大好きだ。

朱い髪が、俺の肩から滑り落ちる。

瞼を縁取る長い睫毛が、白み始めた月灯りに照らされて白い肌に影を作る。

その額に軽く口付けると、ラジアちゃんは少し身じろぎをした。

無防備過ぎるよ。

ねえ。

「ラジアちゃん」

少しでいいから。

「……俺のこと、すまへ。」

……応えない、なんて、わかりきつてこるので。

当たり前だ。

ラジアちゃんは寝てこるので、起きていたら尚咎められないと想へ。

寧ろ、起きていたら俺はそんなこと怖くて聞けないだらうから。

「…………うそ……」

小さな小さなその声に、思わず呪が止まった。

「…………ラジアちゃん?」

名前を呼んでみるけれど、反応はない。

耳元を規則正しい寝息が掠るばかりだけれど、それでも、嬉しそう

て、思わず泣きわなつになつた。

わかっている。

あれはただの寝言で、応えてくれたわけじゃない。

それでも 。

俺はやつぱり、ルシアみたいに誰かを代わりには出来ない。

今ここに、愛しい人がいて、今ここで、愛しいと想つことが出来る。

「俺、諦めないからね」

大好きだから。

だからずっと、いつまでも、俺の世界の中心でいて。

すやすやと眠る俺の世界にもう一度口づけて、そのアルコールの匂いに、少しだけ笑つた。

2 6 sideラジア

あたし達は城内にある一つの塔の屋根にいた。

「ねえラジアちゃん、俺達、迷ったよね？」

答えなかつた。

答えたくないし認めたくない事実の前に、ただ、無情にも風がひゅう、と小さく鳴いて通り過ぎる。

微かな風に髪を揺らされながら、あたしは考えていた。

さて、どうするか。

「地図があればねー」

「あんたが落としたんでしょ」

「ちょっとほんやりしちゃつた。」「めんね

リザが暢気に、にこっと笑う。

絶対悪いと思つていない。

何をどうして人は『絶対』とするのか そつ、何をどうして、あたしはこいつに地図を預けてしまったのか。

「血迷つてたとしか思えない

リザを拾つた時点で、それはすでに時遅しであるひつが。

「『めんね、ラジアちゃん』

「本当にね」

間髪入れずに返したなら、流石に少し、しゅんとしたらしい。

城内は、予想以上に広かつた。

税金を無駄遣いしてるとしか思えない。

人間はこういう権力誇示が好きだな。

顔をしかめて、広大な敷地と豪奢な建物達を見下ろした。

あたしにはわからない。

あたしは人であつて、既に入ではない存在だから。

どんなに豪華絢爛なものを建てようと、いつかそれは塵となる。真の『永遠』は存在しない。

わかつていて尚それに縋るのは、愚か者のすることだ。

「愚か者、ねえ……」

「ルシアのこと？」

今度は間髪入れずにリザが呟きを拾つた。

何あんた、あいつをそういう目で見てたわけ？

確かに間違いないかもしねない。

ただ、ルシアをそう呼ぶならば いや、やめておこう。

ビーチュの説明を思い出す。

三角形の屋根。

白い煉瓦。

さほど大きくないバルコニー。

そして、歌。

曖昧な説明だな。

「あんたが責任持つて探しなさい」

リザに向かって、ぱちんと指を鳴らす。
目を瞑り、リザは耳を澄ませた。

「……あ」
「聴こえた?」
「うん、あつか」

ぱつたり魔術が効いたらしいリザが、右前方を指差した。

リザは直感が鋭い。

第六感と呼ばれるものや特別な能力は無いが、五感に関しては能力者並みのレベルだ。

いや、それ以上かもしれない。

簡単な魔術を掛けてやるだけで、期待以上の力を發揮する。

魔術師つていうのは魔力を持つだけあって、皆大体、それに頼りがちだ。

あたしも例に漏れないので、リザがいると、何かと便利で助かる。

「讃めてー」

「何で」

あんたの所為でしょ、あんたの。

「だつて讃めて欲しい」

「……はいはい。よく出来ました」

柔らかい銀糸を撫でてやると、リザは嬉しそうに手を細めた。

幾つになつても変わらないな。

そう思つた。

リザの言葉を思い出す。

そういう意味だらうか。

あたしは苦笑した。

変わらないものを求めてどうする。

変わらないのは、あたしだけでいい。

あたしはその夢を叶えない。

『永遠』は、ない。

「行くよ」

リザに一瞥くれて、あたし達は屋根伝いにその方向を目標した。

そして、誘導しながら先を行くリザを眺めて、ふと思つ。

「田立つな」

「? 何が?」

「あなたの髪」

月の光を受けてきらきらと、やたら光を振り撒いている。

隠密行動にその血口主張はない。

普段はその田立つな姿で切り抜けられる事柄も多々あるが、今は余計な色と代物に過ぎなかつた。

指を鳴らせば、眩いばかりの銀色は黒へと色を変える。

「わ、すーーい」

何故か嬉しそうにはしゃぐリザを促して、あたし達は目的地へと急

いだ。

目的地を向とか探し出し、こぎ突入しようとすれば、向やう中では揉めていた。

歌つていたかと思えば揉めていたりと、お姫様は多忙な様だ。馬鹿らしい。

「何？」

窓越しに覗き込んでみる。

あたしの肩越しに、リザもひょいと顔を出した。

「お父様、お止め下されこつ！」

「アリア、私は……っ！私にはお前しかいないのだよー。さあ、今度は私の腕の中で歌つておくれ！」

「嫌！」

ぱしゃんっ。

何とお約束な。

お父様つてことは、この国の王だらつ。

私の腕の中で歌つてくれとは、反吐が出る。もつと他にやるべきことがあるだらう。

「お姫様って養女なの？」

「実の娘。ルシアと同等の変態だな」

「お姫様、泣いてるよ」

リザはそつ言つて、あたしの頬に軽く口づけた。
何でこの場面でそつなる。

「話聞いてた？」

「俺はラジアちゃんを泣かせないつていう約束」

にこりと笑つたリザの、見慣れない黒髪が揺れる。
眩しくもないのに、目を細めたあたしがいた。

「……あ、そ

誰もいなくなつた部屋に、アリア姫の泣き声だけが微かに響く。

「……ルシア様……わたくしを助けて……っー」

なるほど。

よくはわからないが、だいたい予想はつく。

そういう口詞を思わず口走るよつな、そういう顔見知りなわけか。

「連れて行つてあげようか

『永遠に』だけれど。

窓から侵入しながら、あたしは声を掛けた。

驚きに目を見開いて、アリア姫は、ただ、あたしを見ている。

「……どうするの？」

「……何故？」

「それが仕事だから」

「貴女は……」

「それは答える必要がない」

沈黙が流れた。

湛えた紫瞳が微かに揺れる。

似ている様で似ていないと、あたしは思つた。

「……連れて行つて

「もつと辛いことになつても？」

ルシアの本懲の目的なんて、わからぬけれど。

何が彼女にとつて辛いことなのか、何で、わからぬけれど。

彼女があたしに似ているということが、偶然とは思えなかつたから
言わなくてもいいことを敢えて、口にした。

「あいつの元へ行けば　『永遠』に帰つては来れないけど」

「……それでも」

金髪を微かに揺らせてあたしを見据えたその紫瞳は、女の瞳をして
いた。

彼女はそれを選択した。

真の『永遠』なんてない。

けれど、偽りの『永遠^{それ}』は、思うよりたくさん存在し、不確定な要
素を孕んで、口を開けているものなのだ。

あたしだってまさか、そんな米俵をひょいと抱き上げ方をするとは思わなかつた。リザの外見からも、想像出来ない扱われ方だつたとは思ひ。

思ひが、合理的ではある。

憤慨してこるアリア姫に、リザはにこりと、場違いなほどいの笑みで答えた。

「だつてほり、追つ手が来てるから戦わないといけないかもしけないし」

追つ手？

と、あたしが首を傾げたなり、よつやくその耳にも階段を駆け上がる音が聞こえた。

「ああ、あんたの耳、まだ術を掛けたままだつたつけ」

「お姫様が叫ぶからだよ」

「だつて……っ！」

「つるむむこなあ」

にこりとまた同じ笑みで、しかし、冷ややかに向けられたりザの蒼い瞳に、ようやくアリア姫はその口を引き結んだ。

ばたん！と勢いよく扉が開く。

「アリア様！」

飛び込んで来たのは、見知らぬ魔術師の女とその他大勢。

「ミレンツィア！」

アリア姫が叫ぶ。

その姿はさながら、連れ去られる人質と映つたことだらう。
「わたくしは行きます！」くらい言つて退ける気概を見せて欲しい
ものだ。

が、ミレンツィアと呼ばれた王城専属魔術師は、彼女を見てはいな
かつた。

「…………ラジア…………ゼルダ…………？」

ぼつてりとした肉欲的な薔薇色の唇から零れたのは、あたしの名前
だつたのだから。

さて、あたしはこの魔術師と面識があつただろうか。
覚えはないが、残念なことに、あたしはそれなりに業界では有名だ
そうなので、知つても不思議はないけれど。

ばらばらとその他大勢の王城お抱え兵士達が、じりじりと、しかし、それなりに素早くあたし達三人を囲い込む。

リザの背後以外を。

「逃がさなくてよ、ラジア・ゼルダ」

「……会つたことあつた？」

明らかに浮かぶ憎悪の色に、思わずそう投げ掛けた。のが、そもそも失敗か。

長くなりそうな予感がして、ちらとリザに田配せをする。小さく頷いたリザは、背後の窓から、ひらりと、前触れなくアリア姫を抱えて飛び降りた。

「き、きやあああ　むべつ」

「ア、アリア様！」

急な展開についていけなかつたのか、しばし固まる王城お抱え兵士達と//レンツィア。

「あんた達、そんなんじやまだまだだな」

ふんと鼻で笑つて、あたしも続いて脱出した。

「お、追え！賊を逃がすな！アリア様を奪還せよー。」

背後の塔から聞こえたミレンツィアの怒声と、追つて放たれた火炎系魔術の無数の矢を避けながら、ひたすらに屋根を走る。

「氣絶させたの？」

「だつてうるさかつたんだもん！」

追いついて隣を走るリザは、またも邪氣のない笑みで、どうでもよきげにそう言った。

「ラジア・ゼルダ 貴女の所為で、ルシア様は……！」

すっかりあたし達を見失った後、ミレンツィアが、美しい顔に憎悪を滾たぎらせそう恠めぐらいていたことをあたしは知らない。

カツカツと靴音が響く階段を降りて、地下室のドアの前に、あたし達は立っていた。

その後、アリア姫を抱えたリザと共に城を抜け出して、今、ルシアの屋敷にいる。

リザの髪は、すでに銀色に戻していた。

ドアがゆっくりと開かれる。

錆びた音の後に現れた光景に、アリア姫は呆然と目を見開いた。あたしはただ、嫌悪感に顔をしかめるだけ。

「……そん、な……」

呟きを零して、あたしを見るアリア姫。

「言つたはず」

あたしは非情に言い放った。

そう、言つたはず。

それでも答えたのは、貴女。

「『時間』は?」

ルシアに言われ、あたしは一粒の錠剤を差し出す。

立ち尽くす彼女の背を優しく押しながら、ドアが閉まる瞬間、ルシアがあたしを見た。

「私は手に入れましたよ」

一言だけ呟いて笑むと、ドアは閉められた。

ルシアは手に入れた。

何を？

『玩具』を？

しあわせを？

偽りの『永遠』を？

あたしは、リザがそつと握ったあたしの手を、握り返すことしか出来なかつた。

『永遠』なんて、ない。

Witch of Gloden in side III (前編)

ルシアとミレンツィアの過去話。

ラグト国中央都市ハシルスより二日三晩馬車を走らせた最北部には、名も無き森と呼ばれるグレーデン地区がある。

ここには古くから『グレーデンの魔女』の言い伝えがあり、森の中の名も無き丘には、彼女の館が静かに、不気味に佇んでいるという。

「で？」

あからさまに侮蔑の視線を向け乱暴に書類をデスクに投げたわたくしに、部下であるロイズの肩がびくっと揺れた。

上司とは言え何十と年下のわたくしに萎縮するとは、魔術師として情けない。

背丈ばかりひょろひょろと伸びて、実力は二十歳にもいかないわたくしより圧倒的に下。

世間では『傍げな美少年』だなどと騒がれているらしい緩くウェーブしたボブの白金髪^{プラチナブロンド}に同色の瞳を湛えたロイズ・フェアニーへの印象は、そんなものだった。

「あ、あの、それで……」

「はつきり喋つてください、これでも多忙なんですね。部下ですのに、そんなことも把握していないと？」

用件など先ほどの書類で充分に理解はしていたが、とにかくわたくしは彼が最初から気に入らなかつた。

あの『生ける伝説』の講習会から半年、わたくしは王都専属魔術師見習いから、王都専属魔術師に昇格していた。これだけの素質と実力があれば当然のことだと思った。だからこそ、直属の部下にも、それ相応の者が当てがわれるものだと思っていたのに、やつて来たのは、おどおどとした彼だったのだ。

わたくしほどの人材に、彼が部下？

信じられない！

あまりのことにロイズの経験を片っ端から調べ廻した。

特筆すべき点はなし。

特技もなし。

ただ、魔力測定値のみが測定不能と書かれているだけで、魔術学校の成績も上の中といった程度だ。

愕然としたのは言うまでもない。

もちろん、部下としての仕事ぶりも可もなく不可もなくである。美少年と言えど、わたくしに比べたなら大したことはない。

それは『生ける伝説』^{はいけつわく}にも言えることだが……あの講習会のことを見つけて、腸^{はら}が煮えくり返りそうになつた。ふと思い出して、腸^{はら}が煮えくり返りそうになつた。知らず、ロイズへの視線がより厳しくなる。

「で、すから……み、ミレンツィア様には、『グレーデンの魔女』討伐隊編成を、お、お願いしますっ！」

「そんなことわかつてますわ」

「えっ」と間抜けな声を発したロイズを無視して、くるりと椅子を反転させた。

これは、出て行けといつ合図。

「……し、失礼、します……」

消え入りそうな声が僅か鼓膜を打ち、静かにドアは閉められた。

『グレーデンの魔女』か。

「お伽話だとばかり思つてましたわ」

数百年も前から語り継がれたその物語はあまりに有名で、また、グレーデン地区には人が住んでいないこともあり、個人的には半信半疑だつた。

具体的な記述があるわけでもなく、そういうた類の話は世の中にごまんと溢れている。

いちいち真偽のほどを確かめるほど、国の専属魔術師達は暇ではないのだ。

そしてつい一ヶ月前のこと。

グレーデン地区に隣接するパピロの町から、やくし薬師の娘が薬草を探り

に森へ入つて行つたらしい。

これは娘の祖母や町の住人達からの確かな証言であり、實際、森へと入つて行く姿を見た者もあると言ひ。しかし、一週間経つても娘が帰らないので、第一次搜索隊が町の役所より派遣された。

これが一週間前のこと。

搜索隊が帰還しないので、今度は祖母がなけなしの金で雇つた裏魔術師を派遣し やはり帰還はしなかつた。

裏魔術師なんて無法者を雇つからだとは思うが、それなりに近辺では名の通つた者であつたらしい。

辺境であることを考慮して、町の搜索隊よりは、と言つたところか。ついには話が大きくなり、伝手の伝手を辿つて、ここまで話が舞い込んで来たわけだ。

どうやら娘の祖母は、王城に勤めていたことがあるらしい。

「魔女を見たというわけではないのですわね」

ペラリと書類を捲れば、ロイズがまとめた『グレー・デンの魔女』についての記述があつた。

『グレー・デン伝承記』『ラグト国記』『ラグト建国史』『魔女伝説』様々な書物から『グレー・デンの魔女』についての記述抜粋が成されているが、どれもが言い伝えの域を出ない。

ただ一つ、田に留まつた一文があつた。

“『グレーデンの魔女』が最初に確認されたのは、百七十年前である”

百七十年前？

引用は『世界の伝承一覧』……いまいち、信用出来なさそうな本ではあるけれど。

立ち上がり、執務室の本棚からそのタイトルを探し出す。

「あつた……発刊は十年前ですわね」

裏表紙に初版があるので、つまりは百九十年ほど前ということだ。
魔術師の平均寿命は三百年。

とすると、割りと最近でることに、少しだけ驚いた。
まあ、魔力 자체がピンからキリまで個体差が激しいので、この平均は飽くまでも平均の域を出ず、参考にはならないけれど。

実際、三百年以上生きている現役魔術師をこの城で挙げるなら、最上級魔術師であろうと数人しか……

「……あ」

ふと思い当たつて、胸が高鳴った。

「ロイズ！」

「は、はい、ただ今！」

軽く声を上げたなら、すぐさま、返答と共にドアがノックされた。いつも反応だけは一人前だが、果たして彼は、きちんと職務を全うしているのだろうか。

入室を促し、相変わらず俯きがちな彼にほんの少し目を細めてから、口を開いた。

「王城で二百年以上勤務している魔術師は誰ですか？」

わたくし自身、この地位に身を置いていようとも、実質十八年しか生きてはいない。

しかしながらロイズは実齢五十七歳であり、少年の姿をしていても王城勤めは長い。

少しは知識に明るいだろう。

彼は僅かに考えてから、おずおずと返答した。

「知る限りでは……せ、専属魔術師総括のティノ様と最上級魔術師のバーべナ様、ラキュー・シア様、貴族でもあるルシア様の四方ですが……」

決まりだ。

わたくしがほくそ笑んだことをロイズは見ていただろうか。
どちらでもいいけれど。

ディノ様は総括であらせられる以上、多忙を極めていらっしゃること
は想像に容易い。

バーべナ様は消費型魔術師であり、老体であるし、ラキュー・シア様
は確か他国に出張中のはずだ。

「ルシア様に連絡を。お伺いしたいことがあります、と
か、かしこまりました」

一礼し退室したロイズを見送つて、つきつきとクローゼットを漁り
出した。

翌日によく晴れた午後一番の時間。

お気に入りの刺繡入りブラウスに専属魔術師正装である紺色の膝まであるロングジャケットを着て、待ち合わせ場所へと向かった。
本当なら正装する必要などないけれど、ルシア様にはぜひ、わたくしの成長の証を見ていただきたいもの。

ルシア様 ルシア・アズガルド様はラグト国の上級貴族であり、
王都専属最上級魔術師でもあるという稀有な方。

この国の貴族は国政に関わることが多く、上級ともなれば多忙を極めることが多いと聞く。

貴族自体が血筋によるもので、それを優先するあまり、魔力があると魔術師になる者は少ないと言つて、魔術師であることをえらぶ極められた素晴らしい方なのだ。

そして容姿も凛として美しく、紳士的な態度は、常に様々な人々から賛辞を受けてやまない。

ライバルが多いと、如何に上手く出し抜くか、乙女としては重要な項目！

努力に努力を重ね、尚且つ、このあまりある資質と美貌はまさに…まさに、ルシア様のお傍にいるに相応しいのに！

なのに……あの講習会の後、ルシア様は『生ける伝説』を伴つて、会場を後にしたと聞いた。

ラジア・ゼルダ　あの女が登場した瞬間から、ルシア様はわたくしの話を全く聞いていらっしゃらなかつた。

しかも、わたくしを置いてさつさと……。

いいえ。

きっと、伝説と呼ばれるほどの裏魔術師が珍しかつたに違いない。噂によれば総括のディノ様より長生きで強いそうだし。

そんな女はもう、化け物級だ。

変わりダネの話を聞くのも一興つてところに違いない。

きっと、一緒に出て行つたのも、そんな理由。

自分で立てた仮説に「なかなか悪くないですわね」と一人呟いて、すらりとした立ち姿を目にし、思わず微笑みが浮かんだ。

「お待たせして申し訳ありません、ルシア様！」

たたつと駆け寄ったなら、「……ああ」と、じりじりを向いて微笑んでくださった。

「ミリー、専属魔術師に昇格したんですね。おめでとうございます」「は、はい！ ありがとうございます！」

嬉しい！

嬉しい、嬉しいです、ルシア様！

貴方のその笑みがわたくしのみに向けられていると思うだけで、体中の血が滾^{たき}り心臓が止まるほどに！

ルシア様は滅多に魔術師の正装をなさらない。

必要な場面でのみ義務付けられているものだからわたくしもほとんど着用はしないけれど、専属魔術師というのは、ラグト国では結構な位置付けにある。

事実、これ見よがしに着用しては職権濫用している者もいるくらいに。

その飾らない天性の紳士的な態度が、また素晴らしい素敵だと惚れした。

「部下のロイズから連絡がありました。『グレーデンの魔女』討伐隊編成を任せられたと……」

ふむ……と少し考える素振りを見せたルシア様に首を傾げたら、立ち話も何だと、中庭のベンチにエスコートされた。

「どうぞ」と先にわたくしを座らせてから、ほどよく装飾の施された猫脚の木製ベンチに、ルシア様が優雅に座る。どこにいても様になる方なんて、ルシア様をおいてはそういうだらうとほんやり思った。

「魔女についての記述があまりに伝説めいたものばかりで頼りないんです。ルシア様なら、詳細までいかずとも、何か知つてらっしゃるかと」「

いつまでも眺めていたかったけれど、わたくしとて専属魔術師の端くれ。

成果を上げ、ルシア様に見直していただきたい。
あの裏魔術師より、わたくしの方がよっぽど魅力的だと思っていただきたく。

早々に話題を切り出したわたくしに嫌な顔一つせず、ルシア様は口を開いた。

「『あれ』は私が造ったのですよ

『あれ』……あれ、とは『グレーインの魔女』のこと?

「……え……」

疑問符さえ付かない意味のない言葉が、ぽろりと、口から漏れた。

ミレンツィアの翡翠色の瞳が困惑に揺れた。

まだ十八歳であるという彼女は、外見もさながら内面もまだまだ未熟なようだ。

少なくとも、私の言ひことに関して、ありのままを受け止めるだろう。

馬鹿な女だと思った。

「冗談ですよ」

はつと我に帰つたミレンツィアの顔が、みるみる真っ赤に染まつた。

「でつ……ですわよ、ね！」

「私の知つていることなど、大したことではないかもせんが

それでもと粘る彼女に、それなりな情報を流してやつた。

「『グレー・テンの魔女』は実在します。そもそも言ひ伝えのよ^{おおやけ}うに記述された書物が多いのは、ラグト国^{おおやけ}自体、魔女のこと^{おおやけ}を公にしたくなかつたからでしょう」

「何故ですか？」

つぶらな瞳が純粋に疑問を浮かべる。

「理由は様々でしうが、一番に、あの魔女は館を出ない。稀に触^{セシ}手^サに引っかかる者もいるようですが、範囲はそう広くない」

「センサー、ですか？」

的確に伝わらなかつたが、そう仕向けたのは自分なので、敢えて触れずに話を進めた。

「つまり、報告されるような実害が少なかつたのです。皆無ではありませんでしたが……大抵の地元の者は、あの森には入らない。被害者がいたとしても、旅人や浮浪者でしょう。軽罪人などは処罰の一環として森に追いやられることがあつたようですが

事実、あの森自体に居を構える者はない。

管轄はパピロの町であつても、グレー^{ゲー}デン地区は独立したものである。

『地区』とはすなわち『立ち入り禁止地区』と同義語だ。

「では何故、薬師^{ヤクシ}の娘はわざわざそんなところに……」

ミレンツィア・ドリス ようやく思い至つた。

彼女の実家は確か、魔術具販売で財を成した一族だ。

息子が商売の縁で知り合つた娘が王都専属魔術師で、結婚を機に引退したのだと耳にしたことがあつた。

裕福であると、下層の生活まで想像が及ばないか。

「金がないのですよ」

「お金、ですか？」

未だ理解及ばぬ表情で、真剣に疑問を投げてくる。
考えていないのではない、思いもよらないのだ。

「あそこは辺境で森の向こうにはモンテ山脈が連なり、見所が少ない。わざわざ訪れる者もないでの、もちろん、財政も厳しい者がが多いのです」

「……あ……」

途端、ようやく理解したのか、この地では珍しい真白い肌が羞恥に染まつた。

「薬草が……買えないんですね……」

「名も無き森は『地区』であり、荒らされ難いぶん、そういうのも豊富なんでしょう」

緩く風が吹く。

彼女のロングヘアが攢われ、表情を一瞬隠した。

「薬師の娘は……大丈夫でしょうか」

私は答えなかつた。

やはりミレンツィアはまだ未熟だ。

『討伐隊編成』を言い渡された時点での結果などわかり切つてゐるのに。

「貴女は貴女の出来ることをなさい。そつですね 私も同行します」

「えっ？」とミレンツィアの顔が弾かれたように私を見た。翡翠色の瞳には、柔く相変わらず嘘くさい笑みを浮かべた、私が映つていた。

「さて」

ミレンツィアが自室に戻り、よつやくベンチから腰を上げる。砂漠と荒野に囲まれたこの国の風は、相変わらず乾いていた。

私のようだと、ふと思つ。

永遠に満たされない飢え、永遠に満たされない気持ち、永遠に救われない魂。何と馬鹿らしく、下りなく、そして、素晴らしい心地であろううか。

私に『しあわせ』などは来ない。

しかし、少なくとも、永遠を感じられる程度の『それ』は手に入れた。

少なくとも、あのときの望みは手中にある。

「尻拭い程度はするべきでしょ」

誰のためでもなく、私自身の今後のために。

つこと王城を見上げ、多忙で有名な彼の元へと足を向けていた。

「久しぶりです、『テイノ』

魔術師総括である『テイノ・ブランゼスは書物に埋もれていた。

「……入室許可は出しました」

「機嫌は麗しくなさそうだ。」

ちらと向けられたアッシュュグレーの瞳は剣呑で、すぐまたデスクの書類に戻された。

「顔パスでしたよ」

「使い物にならん秘書だ、クビにする」

「そう仰らずに」

デスクと同じく書物が山積みとなつたソファの空いた一画に腰を沈め、彼の仕事が終わるのを待つ。

大して待たずとも、ディノは自ら切りを付けたようだ。

「何の用だ。お前が儂に用など、ろくでもないことに決まっておるうがな」

「貴方の長所は慈悲深いところですよ」

それは短所と表裏一体。

いつか彼は、痛い目を見る事だろう。
それが私に関する事とかは知らないが。

瞳と同じ、少し白髪の混じつたアッシュュグレーの短髪を撫で上げながら、ディノはパイプを銜えた。

ソファの前まで来てから座る場所がないことに気付いたのか、デスク上の書物を乱雑に投げ捨てるとそこにどかっと腰掛ける。

ディノは壯年になるまで普通の人間だった。

持続型魔術師には珍しく、突如、眠っていた魔力が解放され魔術師

となつたまさに稀有な例であり、容姿年齢はそこから止まつてゐる。持続型のほとんどが少年から青年程度の容姿をしてゐるので、箱が付いていいのだと本人は思つてゐるらしいが。

「で、何だ」

「『グレー』テンの魔女』討伐隊に私も同行します

ぐ、と、彼の眉間に皺が刻まれた。

「哀れな生贊への罪滅ぼしか？」

哀れだと？

笑わせてくれる。

「私に人としての善悪などないことは承知でしょう」

「『ルシア』もとんだ奴に利用されたもんだ」

「口外しない貴方がすきですよ」

私は笑みを深くし、同時、彼は眉間の皺をより深くした。

ディノは知つてゐる。

知つていて、私を容認してゐる。

それは単に彼の魔力が私に及ばないというだけでなく、彼自身の人

柄によるところが大きい。

ディノは知っていた　　『ルシア』の苦悩を。
ディノは理解していた　　『私』の欲望を。
多大な犠牲と膨大な魔力によつて施行された幻術に、ディノが囚われなかつたのは、『ルシア・アズガルド』の最期の望み。

苦悩の解放という最上の望みを叶えてなお、友に忘れずにいて欲しいという贅沢で残酷な望みだ。

そして。

「貴方は私の良心です」
「そんなもんは自分で持つとけ」

パイプから豪快に煙を吐いたディノに笑みを浮かべてしまつ私に、満足そうに、彼は笑うのだ。
笑わせてくれるな。

笑わせてくれるな、『私』のなけなしの『良心』よ。

W i t c h o f G l o d e n · 2 s i d e ルシア（後書き）

まだ続きます。

討伐隊編成の指示を受けてから僅か三日で出立を可能にした。未だ、薬師の娘は怯え戦っていることだらうと思つと、胸が痛んで堪らなかつた。

三日でも遅いくらいだと思つ。

わたくしは、そんな経験はなかつた。

お父様は優しかつたし、お母様は厳しいながらもわたくしを愛していくださつていてのことだと知つている。

恵まれた環境を、生きていく術を、わたくしの両親は^{すべ}教えてくれていた。

薬草一つ、満足に買えない環境つて何？

薬草一つのために、危険な地区に行かねばならない環境つて何？

討伐隊編成のため、選抜した魔術師達の口程を無理矢理最短で捻じ込んで調整する間、ずっと考えていた。

パピロの町は確かに廃れており、薬師を営む家は一軒しかないらしい。

辺境であるパピロに街から商隊が訪れるのも稀で、もちろん、価格は法外に高価だそうだ。

しかし、パピロの薬師が法外な値段で薬を売る」とはなかつたと、調書には記載されている。

いつかお父様が言つていたことを思い出した。

『パピロへの商いは儲からない』

幼少のわたくしには意味がわからず、ただ、そうなのかと思つたばかりだつた。

そんな環境で戦つてきた娘。

想像を絶するほど過酷な状況で生きてきた娘に、これ以上の試練など、何故与えることが出来ようか！

薬師は薬草がなければ商売にならず、また、薬師によつて、助けられている人々があの町には確かにいるのに。

この三日が歯痒かつた。

わたくしがここで出来ることと言えば、お父様にパピロへの商隊編成願いを出すことくらいだ。

詳細を記載したので、きっと、良心的な価格で卸してくださるはず。わたくし自身、出来る限りの私財で薬草を購入したので、出立の際にはそれを届けるつもりでいる。

そうして三日後、わたくしとロイズ、ルシア様を含めた最上級魔術師一人と専属魔術師五人、軍人十人で編成された討伐隊は、ハシルスを出発した。

「ハ、ミレンツィア様、大丈夫ですか？」
「何がですか？」

終始落ち着かない様子のロイズの言葉に、額に青筋が走る。

大丈夫かですって？

なら、あの馬鹿男を黙らせて！

「おいおい、ミレンツィア嬢、大丈夫かあ？あんたにやまだ、荷が重いんじやねえの？」

無遠慮な物言いに、また、青筋が増える。

声の主は専属魔術師ゾルゲ・ヴァイヴァリー 規格外の体躯と無

骨な手、大雑把で粗野な性格をしたわたくしより年上の青年だ。

青年とは言え、実年齢はわからないけれど。

ゾルゲは出発してからずっと、こんな感じでことあるごとに、わたくしに絡んでくる。

今だつて、そう広くない幌付きの荷台で調書を読んでいただけだと言つのに。

失敗した。

焦るあまり、実戦経験と実力ばかりを優先させ、人柄まで考慮しなかつた結果だ。

けれど、ルシア様がいる以上、売り言葉に買い言葉のような馬鹿な真似は出来ない。

わたくしはただ、黙つてやり過ごすしかなかつた。

「ゾルゲ、いい加減にやめてよ

ロイズが吃^{ども}ることなく苦言を呈す。

普段もそつやつてわたくしに話せばいいのに。

逸れた思考の隅で、「けつ」と唾を吐いたゾルゲに引き戻された。

「だいたい、何でロイズ様ほどのお人がこんな女についてやつてる
んですか？」

ロイズ様ほどの人？

どういうこと？

二人は知り合い？

あきらかに理解及ばずといった感じで首を傾げたわたくしに、ほら
見たことかとばかり、ゾルゲは嘲笑つて見せた。

「ゾルゲ」

「いいじゃねえですか。ついでだから教えてやりましょうよ。この
顔、わかつてないって顔ですぜ」

「いいんだよ」

苦笑混じりで返したロイズに、また、青筋が一本増える。

何、何が『いい』と？

何を知らないと言つの?
わたくしが、何を知らないと?

少なくともロイズとゾルゲはわたくしの知らない何かを知つてゐる。
わたくしの知らないロイズの何かを。

ロイズの経歴は調べたつもりだし、特別な何かもなかつた。
専属魔術師である以上、無能とまでは思はないが、わたくしの部下
として相応しいとは思つていない。

けれど、ゾルゲの言葉端には、ロイズに対する尊敬の念さえ感じら
れるのは 何故?

と、ふいにルシア様が向かいから口を開いた。

「ロイズは『ジャガーノート特殊能力者』なんですよ」
「え?」

思わず聞き返してしまったとき、わたくしは、どんな顔をしていた
のだろう。

ジャガーノート ルシア様は、ジャガーノートと言つた?

ロイズが『特殊能力者』だと?

「そ、んな……調書には……」

「故意的に削除したんでしょう。誰が、とは言ひませんが……まあ、
記載しない方が身のためでもある能力ですから、賢明とも言えます

がね

「ほらー！やつぱり知らなかつたんですよ、こいつは！」

驚愕、と言つよりは呆然に近い。

こともなげに言つたルシア様も、騒ぎ立てるゾルゲも……ロイズがどんな表情をしているのかも、わたくしには見えなかつた。

『ジャガーノート』とは今までこそ特殊能力者に当て嵌めて使われるが、その含む意味は多々存在する。

古の力、神々の力、特殊魔力、先祖返り、古代種、最強の魔力
全てが『ジャガーノート』と同義語となる。

これらは血筋など無関係に、突如として現れる能力であり、一括して言えることは『魔力を消費せずして同等の力を扱える』ことにあら。

そして特徴としては、本人の持つ魔力自体の測定が不可能であると言われて、

「……ああ」

突然に、すとんと腑に落ちた。

何だ、調書にはしつかりと書いてあつたといつのに。
わたくしが理解していなかつただけで、ロイズは嘘を吐いていたわけではないのに。

ただ、わたくしが未熟だつただけだ。

ようやくロイズの顔を見た。

苦笑とも違う、……どちらかと言えば、諦めに近いような、そんな表情を浮かべた彼は、笑つてこむよつて見えて落ち込んでいるようにも思えた。

「何で言つちやうんですか、ルシア様……」

「君の弟子の心情を汲んだだけですよ」

ああ ゾルゲはロイズの弟子だつたのか。

ならば最初からわかりやすく『師匠』とでも呼んでいればよかつたのに。

わたくしには師がないけれど、敢えて挙げるなら、それはお母様。お母様を蔑ろにされるような発言や行動があれば、わたくしだつて、口の一つも挟みたくなるに違いない。

どひまでも、わたくしは未熟だつたのだ。

「…………めんなさい、ロイズ」

わたくしは貴方に相応しくなかつた。

「ハ、ミレンツィアや」

「貴方の今後は、帰つてから考えましょ」

最後まで言わせたくなかつた。

これがわたくしの精一杯だつた。

『特殊能力者』に、わたくしの部下といつ立場は相応しくなどない。

やつぱり、ロイズの顔は見れなかつた。

以降、パピロの町に到着するまで、時折ゾルゲが絡んでくる以外、わたくしに何かを言う者はいなかつた。

いつだつて結局、わたくしは自分のことばかり。

薬師の娘のことも、パピロの町のことも、ロイズのことも、ルシア様のことも。

結局何も、理解などしてはいなかつたのだ。

本当の絶望が、何であるのかさえも。

W i t c h o f G l o d e n · 3 s i d e l l e / レンシタマ（後書き）

まだまだ終わらない番外編。

討伐隊としてハシルスを出発して僅か三時間程度で、隊の者達がミリーをどう思つているのかが容易に理解出来た。

それはミリーが部下であるロイズをどう扱つているかに起因しており、隊の中に彼のかつての弟子ゾルゲ・ヴァイヴァリーがいたことが問題だ。

ゾルゲは粗野で大雑把だが、あれでいて人望は厚い。

それは彼が師事したロイズが出来た人物であつた故に育まれたものであり、ゾルゲ自身、きちんとそれを理解していた。

ただ暴れ回っていたゾルゲ自身を見てくれた自らの師に対する彼の心酔ぶりは半端ない。

よつて、ロイズを蔑ろにするミリーを目の敵にしていた。それは必ずと、ゾルゲに人望を寄せる周りにも波及していく。

「あの女」と口にしたときは、少しばかり首を傾げたが。中には小娘などと口にする者もいた。

女であることは間違いないが、女や小娘と形容するにはミリーの出来は良過ぎる。

たかが小娘は若干十八にして専属魔術師になどなれない。まあ、中身は小娘かもしれないが。

ミリーのロイズへの態度は彼自身が何であるか知らない故のものだと、わかつてはいた。

それを仕組んだのがロイズ自身だということも。

『特殊能力者』いや、ロイズの能力は『最強兵器』と形容するに相応しいと私は思つてゐるが、その彼がミリーの部下を希望した

のだ。

いつか、たまたまそのことを耳にした私は、彼と会話する機会があつた。

「仕組んだそうですね」

「いやあ……お恥ずかしいです」

ロイズのほのかに染まった頬に、懸想しているのだとすぐわかつた。

人畜無害な空気を纏い、誰をも魅了する美しい顔かんぱせを持ち、それでいて規格外の体躯を持つ誰もが手を焼いたゾルゲを懷柔し、・ジャガーノ特殊能力者・トと呼ばれる彼は、若干十八歳の少女に取り入りたいがため、自身好みない手段を使つたのだ。

経歴を弄り、特記を削除し、自らの地位と権限でもつて、部下という地位をもぎ取つた。

「どなたにお聞きになつたんですか？」

「ディノが笑ながら言つていました」

「あはは、笑つてらつしゃいましたか」

私は笑わなかつた。

私はもう知つている。

如何にしてでも手に入れたいものがある、その欲求を知つてゐる。

「おかしなことではないですよ」
「……そうでしょうか」

ロイズは穏やかで優しく、真っ直ぐな男だ。
それでも抗えない欲求に手を染めつつある自分と葛藤しているのだ
らう。

ほんの僅か、伏せた白金の睫毛が同色の瞳に陰りを落とした。

「欲望に忠実なのは実に人間らしいと私は思います。それを卑下する」とはない。欲望に忠実な貴方の方が、私は好きです」

善意の塊のようだったロイズ。

彼が堕ちていく様を私は見てみたい。

……ロイズがロイズである以上、墮ちていくかは定かでないが。
だからと言って、彼を故意的に墮落させようとは思わない。

「まあ、そういうことはないところですよ」

何故なら彼は、私の『良心』^{ディノ}の氣に入りであるのだから。

それが唯一、ロイズを氣に掛ける私の真意だった。

きつかり三日三晩で到着したパピロの町は騒然としており、午前十時を回ってなお薄く霧が掛かっていた。

この程度の霧であれば大した枷にはならないだろうが、取り乱した薬師を宥めるため、一行は町役場へと向かう。

「……整備が必要ですね」

役場の寂れた状態を見て、隣のミリーがぽつりと零した。

私個人の意見としては相応だと思ったが、中央都市しか知らぬ彼女ににとっては衝撃だったようだ。

「あらびづわー」

通された先の応接室も粗末で、隣に座ったミリーは、ただ、唇を噛み締めていた。

結局話を聞いたところで調書とさしたる変わりもなく、泣き崩れる薬師の対処は役場の人間に任せた。ミリーは私財で購入したという薬草を渡していたが、それに何の意味があるのか私には理解出来ない。

直に実家から商隊もやって来るからと、ミリーは皆に告げていた。

「定期的に薬草を送るうかじら」

満足気になりやう言つた彼女に、私の何かが触発された。

「それで」「がよくなるとでも？」

「え？」

またも理解及ばずといつた顔だ。

腹が立つ。

そんなことを思つたのはいつぶりだろうか。
もつじれぼど生きているかさえ知れないのに、こんなことで、私は
腹を立てていいのだ。

「ルシア様？」

「貴女はそれでここが発展するとしても、私財を投入し、私事で援助
し、そしてここは後にどうなる？ 甘えばかりが先行し、自ら行動し
なくなるのが落ちです。そしてまた、噂を聞きつけた輩が貴女に纏
わり付くでしょうね。最後まで面倒を見れますか？ 他の場所も？」

「…………あ…………」

「そんなものは全く満足です」

言葉が足りなかつたかもしねない。

厳しく言い過ぎたかもしれない。

が、私がここまで感情に流されると身體珍しく、こんなことまで

言つてやる」ともまた非常に珍しい。

私自身が自己満足で生きているところだ。

「……行きましょう」

「……はい……」

特別、彼女を買つてゐるわけではない。

ただ、傍らのロイズのミラーを見つめるその白金が、^{バラチナプロンド}何とも言えな
い表情を湛えていたことが気に入らなかつた。

私は『ルシア』と約束した。

『ルシア』は『ディノを気に入つており、『ディノは私のなけなしの『
良心』である。

私は人として欠落してゐるが、それでも『^{ディノ}良心』をそれなりに気に
入つてゐるので、そのためならば多少の役には立つてみせよう。

「ふふ、面白」

ロイズの視線を感じたが、特に気に留めなかつた。

私にも感情があるのだ。

心動かされるものが。

ラジア以外にそんなものが存在するなど　今さらになつて気付く
など。

武装した軍人を先頭に、名も無き森は田前だつた。

そう、尻拭いをしてやるつ 私を討伐することは出来ないが、『
良心』^{ティノ} が見過^ゴしてしまつた『グレー^{ゲー}テンの魔女』という遺物程度
なら。

鬱蒼とした森は深く、中天に差し掛かるといつ日光でさえ地に届
くことはそうなかつた。

「やたらと瘴氣が満ちてるが、これで森が保つてんだなあ」

ゾルゲの言葉に数人が同意を示す。

その程度は感知出来るのか。
あまり交流がないので、正直、如何ほどの者達かわからなかつたが、
それなりには出来るらしい。

軍人の作る道を歩き続けること数時間、ようやく名も無き丘とまつ
り佇む館が見えてきた。

「結局、『グレー^{ゲー}テンの魔女』ってのは何なんですかね」

体力のあるゾルゲは今だ元気に喋り続けており、最もな疑問を口に
した。

「魔術師ですよ 元はね」

「ご存知で?」

「ええ、まあ」

話すつもりはなかつたが、何故だか今は氣分がいい。教えたところで大した害はないだろうし、あるようなら潰すだけだ。

「そうですね……討伐対象を知つておくのも悪くないでしょう」

「……いいのですか?」

どうやらリリーは私が全てを話さなかつたのは、何らかの意図があつてのことだと理解していらっしゃる。

そういうところは聰い女だ。

思つたより大物になるかもしれない、ぼんやり片隅で思つた。

「ええ、暇潰しにでも」

そり、全ては暇潰しに過ぎなかつたのだから。

「あの館には昔、一人の魔術師がいたのです。何の研究をしていましたかは定かではありませんが、少なくとも、合成獣キメラ程度の術は可能だつたそうです」

それは、遙か彼方の昔話。

W i t c h o f G l o d e n · 4 s i d e ルジア（後書き）

もう少し続く番外編。

いつからだつたか……そう、記憶にないほど遙か昔から、私は存在していた。

老いていく体、惨めになつていいく容姿、醜くなつていいく精神……全てが私を蝕んでこのを曰に曰に実感していくことさえ昔のことのようと思ひ。

今はただ、研究に没頭するのみだつた。

私には援助者（スポンサー）が付き、同時、それは次なる『私』となる者でもあつた。

心が踊るとはこのことだと、彼の者と出会つた時をそう記憶している。

私が生きてきた全ては彼を手に入れるためなのだと、実感し涙した瞬間でもあつた。

そんなある日、私の館に誰ぞ訪ねる者がいた。

「わたし、あの……ブライア・フルゲルジと言います」

気紛れにもてなし茶を勧めたなら、おどおどとしながら少女はその名乗つた。

研究の完成は目前で、私は浮かれていたのかもしれない。客を招き入れること自体、彼の者以外は始めてのことだった。

「何の」用で？」

嗄しゃがれた声が耳障りだなど、そんなことを思った。

少女は裏魔術師なのだと語つた。

そして、どこをどう聞きつけたのか、私がしていた研究のことも大まかに知つていた。

「ディディウス様の名は一部の『裏アンダーグラウンド』では有名なんです。……前の大戦の際、あ、ある国に合成獣キメラを譲アヒルったとか、聞いて……」

合成獣キメラなど研究の副産物に過ぎなかつたのでどこぞにくれてやつたことがあつたが、戦に使われていたとは知らなかつた。

それより、私の名が少なからず知れていることの方がタチが悪い。

ブライトと名乗つた少女にはいくつかの傷痕が見受けられた。

前の大戦 そうか、その国から参加したのだな。

そこで噂を聞きつけたのだろう。

探るような視線に気づいたのか、ブライトは慌てて訂正した。

「い、一部つて言つても本当に一部つて言つた！あ、あの、ああもう、そりじゃなくてつ、……その、上官はもつ、戦死してるので、大丈夫つて言つた……」

「そのことを知つているのは貴女だけだと」

「そ、そうーですーた、たぶん……」

どれほど生きているのかは知らないが、見掛け通り、大した頭は持つていないう�だつた。

本来の問題はそんなことではなく、現在、私がここにいることを知つてゐるという事実だ。

現にブライトは『私^{ディティウス}』を訪ねて来ており、ここで茶を啜つてゐる。殺すのは簡単だが、理由を知りたいと思つた。

「何故私がその『ディティウス』であると?」

そう、私はここまで一度として名乗つてはいない。
思い違いだとブライトが帰つて行けばそれでよし。

正直、ブライトは優秀な裏魔術師には見えなかつた。
正式にどこぞで専属として雇つてもらえず裏稼業を営んでいふと言つた風情がある。

宙を彷徨つた視線が一回りして、伺うように私に戻つた。
このとき初めて、彼女の瞳が光の加減で虹彩を浮かべる珍しい紫色
なのだと知つた。

「じ、実はわたし……いわゆる脱走兵?みたいな奴で、して……逃
げてる途中に、結界を見つけたんです……あつ、たまたまですよ!?

「たまたま?」

「あ、はい。あの、ヒンテ山脈側の西の……綻び？みたいなところを見つけて」

しどりもどりに落ち着かない虹彩に、なるほどとよりやく得心する。ブライトは私の視線など気にも留めず、つらつらと蝶り続けていた。

「何でこんなところに結界？って……思ってたら、その、ディーディウス様が……結界に入つてるのが、み、見え、て……」

ついて来た、と。

あまりに行き当たりばつたりなブライトに、久しぶりの溜め息が口を突いていた。

「『ディーディウス』自身を見たことは？」

「え？ な、ないです」

「……では、それは私が『彼』である理由にはならないですね」

全くもつて問い合わせと懸け離れた話をする。

ことりとカップを置いた私に、焦るよつとブライトは畳み掛けた。

「で、でも、あの、貴方にはあの時の合成功^{ヒメラ}の魔力の欠片^{カタチ}がついていた！……あ、ま、した……」

虹彩が鮮やかに輝く。

私の左肩を射抜くよ！」。

「『邪眼』持ちですか」

「あの……よくそれ言われるんですが……何の『』と、ですか……？」

ブライト・フルゲルツは、本当の無知であった。

何故か、と問われたなら『氣紛れ』としか言つようがない。

あれから、まるで当然のよう『ブライト』は我が館に住み始めた。

何も言わなかつた私にも非はある。

しかしながら、あり得ないほど凶太い神経をした彼女にも間違いなく非はある。

年の頃十七歳程度の容姿をしたブライトの癖のある猫毛の黒髪が、ちょこまかとした身動きに合わせてふわふわと揺れる。

女は長髪を好みと聞いていたが、彼女のそれは潔いほどの短髪であった。

一度尋ねてみたなら、金に困つて売つたのだと言つ。

「何でも取つておくもんですねえ……もしかしたら、爪も、伸ばせば売れる……とか……？」

何を馬鹿など、思わず笑つてしまつた。
そうして何度かこんなやりとりが日常に溶け込みつつあつたとき、
ふと気づいたのだ。

私が笑うたび、ブライトの虹彩が、光を帯びて鮮やかになる」ことを。

何年ほど経つたか。

私とブライトの奇妙な共同生活は、至極当然のものになつていた。

彼女が何を思考していたかは図りかねるが、私の研究の助手なども
するまでになつていた。

一度、スポンサー援助者が訪ねて来た際、ちらとその朱い瞳が彼女を捉えたが、
特に何を言うでもなく帰宅して行つた。

大方、用済みとなれば斬つて捨てるとも思ったのだろう。

斬つて捨てる、か。

ふと、何故今まで、それを思考しなかつたのかと不思議になる。
最初は確かに考えていたはずだ。

何故、当然のように傍にいる？

何故、当然のように傍に置いている？

何故、当然のように助手をしている？
させている？

「ディディウス様あ、お茶が入りましたあ」

研究室のドアを当然のよつに開け、忌まわしいもので埋め尽くされた歪な空間をものともせず、ただ無邪気に、無知なまで真っ直ぐ私を捉える虹彩がにこやかに弧を描く。

「……今行きます」

邪眼に囚われてしまつたか。

そんなはずは私に限つてもちろんなく、ただ、ここに数年無意識に感じていた何かに気づいてしまつたのだと、ただ、困惑していた。

彼女は無知だつた。

それは天性の魔性であり、故に、邪眼という特殊能力を与えられたのか。

この時点では、答えは出なかつた。

ある日、食料調達にブライトをパピロの町に行かせた。

特別足りていらないわけではなかつたが、何となく、年相応のことをさせてやりたいと思つた。

彼女が言うに、容姿年齢と実年齢はそつ違わないらしい。

エンデ山脈方面から回るには遠かるうと、彼女のために、わざわざ町の外れの方に結界の歪みまで作つてやつたのだ。

「私としたことが、本当に珍しいこともあるものです」

一人呟いて、ふとフラスコに映った老人の顔は、確かに笑みを浮かべていた。

それからというもの、ブライトはやたらと町に行きたがつた。まともに買い物も町中見物もしたことのない彼女にとつて、それはさも楽しいことだったのだろう。

あんな寂れた辺境の町に私が思うのは、その程度のことだった。

小遣いまで渡し、ただ、自己満足に浸っていた。

「ディディウス様……わ、わたし、す……す？」

さらに数ヶ月経つたある晩、二人で食卓を囲つていれば、ブライトが指を擦り合わせながらもじもじと口を開いた。

「……すきな人が……出来まし、たつ！」

耳まで真っ赤に染め上げた彼女に、時が止まったのは、何故だったのか。

何をどう話したのか覚えていない。

それでも概要はしつかり理解しているのだから、もつぶくしてはないらしい。

ブライトはパピロの町でヘンゼリーと言う青年と仲良くなつたらしく、顔を合わせてゐる内に恋慕に発展したらしい。

何だつたか……ああ、確か食料品店の息子だつたと言つていた。優しいだの格好いいだのと言つっていた氣もするが、盲目となつた彼女の戯れ言だ、眞偽は定かではない。

「…………そうですか」

「ディ……ディディウス……様……？」

果たして彼女の邪眼には何が映つていたのか。
グラスに映つた私は、ただ、昔のような笑みを浮かべていた。

「以上です」

「え？」

私の言葉に、ミリーは目を見開いてそれだけを返した。まさに、鳩が豆鉄砲を食らったかのような顔だ。思わずくすりと笑えば、はっと我に返ったのか、「え？でも、え？ 終わりですか？」と慌て出した。

「肝心なところは知らないんですねかい？」

納得いかないのか、ゾルゲでさえも首を捻つたまま頭を搔いている。

「魔女そのものの容貌は知っていますよ。触手があります」

「触手？触手……あ、触手……！」

ようやく行き当たった答えに明るくなつたミリーの表情は、直後、急速に青ざめた。

砂漠に近いラグト国では珍しい真白い肌が、より作り物のように見える。

「で、強いんですかい？」

ゾルゲが舌舐めずりをした。

この男は専ら闘争本能が強い。

「強いでしょうね、そして大きい。『グレー・デンの魔女』は、ラグト国が黙認した國そのものの闇です」

あの醜い老人が生み出し、ディノが憐れみ、情けを掛け黙認した巨大な闇の遺物。
くだらない。

ふと笑った私を見留めたらしいミリーが、一瞬、恐怖を顔に走らせたが、知らない振りをした。

館はただ、名も無き丘の上に静かに佇んでいた。

その周囲を焼くような瘴気が渦巻き、びりびりと肌を刺激する。

そう、これは妄執。

あの醜い老人と、彼女自身の憎悪と思慕の成れの果て。

すでに感知はされているに違いないが、さて、かつての無知はどう出てくるのか。

『私』を嗅ぎ取つて歓迎してくれるだろうか　否、いくら彼女が

無知であつたとしても、それは遙か昔の過去に違ひない。決して『私』を歓迎はしないだろう。

「間近だと肌が焼けそうですね……この瘴気じゃもう、娘は……」「言わないでロイズ！まだ、まだわからなくてよー！」

本当はミリーも理解している。

魔力を持つ者であつてこの肌を焼かんばかりなのだ、護られてもい
ない一介の娘が、無事であるはずなど皆無。

「く、あ、開けます！」

魔力防御壁に護られてなお汗を滲ませた一人の軍人が、先陣を切り、扉に手を掛けた途端、だつた。

「」

素早く扉の隙間から這い出した触手が、あつという間に彼を連れ去る。

ぼき、ばせ、ほきべや、と滑稽な音がして、辺りはしんと静まり返つた。

「 か、彼は！？」

走り出そうとしたミニーをロイズが咄嗟に羽交い締めにした。

「死にたいんですか！？」

「！」

ぎり、と彼女が噛み締めた唇からは、僅かに、鉄の匂いがした。

「あれが触手ですよ、初めて見ましたか？ラグト王城にはない代物ですからね」

ディノが総括となつて以来、人間の尊厳を冒すような物騒な代物は全て排除された。

あの国の魔術は極めて穩やかなものだ。

このまま維持することが出来たなら、国内に至つてはそれなりに安寧が保たれるだろう。

まあ『白き魔女』にでも田を受けられたなら話は別かもしれないが。

僅か暗闇を覗かせる扉の隙間をぼんやり眺める。

これが感慨深いという感情なのだと、遅まきに自覚した。

「ああ……」

零れ落ちた咳きに含まれた意味は何であったか。
意味などないのかもしれない。
しかし、どちらでもいいと思つた。

「今行きますよ……プライア」

どれほどぶりか、懐かしくも甘美な響きを伴つた名を呴いて、意思を持つて、私は扉を開いた。

触手が襲つて来ることはなく、背後から聞こえた様々な声をも無視して、懐かしくも歪な思い出を抱える『我が館』を進んで行つた。

「グウ……ウウウ……ア、アア……」

醜悪な化け物はそこにいた。

声にならぬ声を漏らし、かつて歪んだ妄執を収めていた研究室に、
ところ狭しと根を張り巡らせていた。

そこらじゅうにガラス片が散らばり、かつて存在していた妄執の欠片達は跡形もなかった。

いや、正確には『グレー・テンの魔女』に吸収されていた。

現に、行方不明となつた娘の顔が、肢体が、本体の右側に埋め込まれていて。

破れた服から覗く発展途上の乳房が上下に揺れていたが、それは娘の息のせいではない。

触手が蠢く振動でそう錯覚するだけだ。

あれでは救出は無理だろう。

慈悲の欠片もなく、ただ、そう思つただけだった。

その他様々な生き物を飲み込んだらしい魔女の体 体と呼んでいいものだろうか。

そこにただ在る物としか、私には思えない。

狼やら野犬やら、ここにあつたであろう実験体やらが、そこかしこから顔を覗かせていた。

ただ、あの紫の虹彩だけは中央に鎮座しており、濶みつつも、のつそりと私のことを見据えていた。

僅かながら、ぼんやりとしたブライトの輪郭を残して。

「ずいぶんと育ちましたね、あんなに小さかったのに」

ふふ、と小さく笑えば、紫の瞳が、まるで意思を持つかのようにきよろりと動く。

意思があるだらうか。

これまでに憎悪と妄執を喰らい、肥大してまで、それを持ち得るだらうか。

私ならば気が狂う。

『ブライトだと、正気とは思わないし思えない体ならくではあるが。

たん、と軽く靴で床を叩けば、ぶわっと一気に結界が広がる。

そう　ここはかつての我が館。

我こそが真の主であり、他の者は必要ない。

永年でもって館中に張り巡らし、構築し完成させたそれは、時を経てなお、完璧に作動した。

「私と貴女の時を経た邂逅です。邪魔をされたくはないでしょ？」

大きく、声にならない醜い咆哮が、館を震撼させた。

しかし、これほどに醜悪な化け物が存在するとは。

他人事のように『グレー』『テンの魔女』と成り果てたブライトをしげしげと眺めた。

あの華奢だった象牙色の体は歪な幹のように膨れ上がり、幾重にも絡まつたそれによって、かつてブライトの体にあつた傷跡など一つとして見つけられはしない。

癖のあつた黒髪はもともと短いものだったが、すっかりぶくぶくとした肢体にめり込んでしまっている。

「様々なもの達と一緒にになってしまった彼女は、まさに、『合成獣』と呼ぶに相応しかつた。

いつか彼女が見たと言つ合^{キメラ}成獣は獅子に翼を生やした代物だつと予測出来るが、それは副産物であるつと、それなりにしなやかで美しい造形であつたと記憶している。

あの日、湧き上がつた感情は何であつたか。

ただ赦せなかつた。

私を見るたび鮮やかに輝く虹色の虹彩が、別の男に向けられることが赦せなかつた。

生かしてやつた恩を、傍に置いてやつた恩を、情を傾けてやつた恩を、全てを裏切られたような気になつた。

私はただ笑い、そして、彼女もまた笑つた。赦されたように笑つたのだ。

懐かしい記憶が蘇る。

「祝杯をあげましょ

う」「祝杯ですか？」

ちよこんと首を傾げたブライトに、年代もののラグト産の砂漠酒を勧めた。

メンテ砂漠には極端にオアシスが少なく、そのオアシスの水は、
水と思えぬほど爽やかな口当たりでまろやかな舌触りだと言つ。
その水と、希少価値の高いガジュの実を漬け込み、魔力ある酒職人
によつて造られたラグト産の砂漠酒は、ブライトが一生を対価にし
よつて口に出来る代物ではなかつた。

「二、これが噂の、です、か……！？」

感動に飲まれた彼女は、疑問も抱かずにグラスを飲み干した。

先に酔つてしまえばいい。

思つた通り、四杯目辺りで虚ろになつた瞳が宙を彷徨い出す。

「これで最期にしましよう」

「最……後……です……かあ……」

「ええ、最期です」

グラスの中には一滴だけ、合成獣生成剤^{キメラ}が混入されていた。

懐かしい記憶^{ジャガーノート}だと、場違いにも感嘆の息を漏らした。
あれは『特殊能力者』専用に、ブライトに出会つてから、気紛れに
作ったもの。

効果を試すつもりはなかつたが、いつなるとは予想だにしなかつたのも事実である。

あれからすぐに本来の目的は達成され、『ディノと共に館を出てしまつた。

当時荒れていたラグト国は私の幻術を完成させるための人柱の人選に苦労することなく、訝しむ者、邪魔な者は掃いて捨てるほどいたのだから幸いだ。

私は『ルシア・アズガルド』。

それ以外では在り得ないし、疑惑の視線も貶めも必要ない。

「……グ、ギギ……ガ、アアアアアアツ！」

獣の咆哮で我に返る。

そうか、『グレーーテンの魔女』は、私が『私』として在る前の、甘美で残酷な遺物。

「私はなかなかに、貴女のこと好きでいたようですよ」

にこりと微笑んで指を鳴らせば、目の前には淡く輝く魔法陣が出現した。

五芒星を二重円で囲んだそれの中心には、私の真名まなが刻まれている。館が、呼応するように震えた。

ひゅ、と空を斬つた触手を避ける。

ああ、こんな様になつてなお、貴女は死にたくないと言つのだらうか。

確かに、ヘンゼリーだつたか……もう遙か昔に朽ちたであろう青年を、未だに想うのであるうか。

馬鹿らしいとは思わない。

くだらないと卑下もしない。

私はもう、その想いを知つてゐるのだから。

「貴女はきっと……わかっていたのかもしませんね

邪眼持ちであつたブライト。

『邪眼』とは、様々な魔を見透かす特殊能力。
だから、私に付いた微かな合成獣^{キメラ}の魔力片も、この森の結界の穴も見つけることが出来た。

今思えば、酒に忍ばせた一滴であるうと、彼女ならばわかつたはずなのだ。

それが幸か不幸か、私の知るところではないが、結末は目前にあつた。

「ウ、ウウウ……テ、ディウ、ス……サ……マ……」

泣いているようにも聞こえ、哀願のよつとも聞こえた彼女の声を本当の最期に、私は私の敬意で以つて、魔法陣を発動させる。

「 我が真名は『ナウサン・ティティウス』。彼の者に、^か永久の
安らぎを ^{じわ}」

遙か彼方に追いやつたはずの私の真名。
それを口にすることが、彼女に対し、過去に対する、せめてもの
私の敬意。

一瞬にして碎け散った肉片が、かつての研究室を慘たらしく赤で染
めた。

「 さて、結界も解除せねば。我が『良心』は、満足してくれま
すかね」

ふと、頬に伝う久方ぶりの感覚に、少しばかり、胸が締め付けられ
たのは何故だろうか。

W i t c h o f G l o d e n · 6 s i d e ルシア（後書き）

もう少しで番外編終了予定。

報告書を読んだティノ様は、何とも言えない渋い顔をしていた。

「つまり、ルシア一人で魔女を退治したってことか」

「はい、返り血され浴びておられませんでした」

「そうか」

ティノ様は、わたしが退室するまでずっと、その表情のままだった。

最上階の総括執務室から真っ直ぐ、一階の中庭へと足を運ぶ。

整えられた縁はバランスよく配置され、幾つか置かれたベンチで歓談する人々も見える。

雨が降ろうが例え槍が降ろうが、防御壁に囲まれたここは、いつだつて憩いの場だ。

ここは箱庭　常に守られ、笑みの絶えることない王城を作るための。

ふと考える。

箱庭はここだけだろうかと。

現在のラグト国基礎を作り上げたのは、総括であるティノ様だと言つ。

それに賛同し一手を担つたのが、最上級魔術師の地位にあるバーべナ様、ラキュー・シア様、貴族でもあるルシア様の四方であり、その功績を讃えた上で現在の地位にいらっしゃる。

そう伝えられているし、当時から国王は魔力持ちではなかつたため、真実を知る者は、この国にはいない。

実質、最長齢である彼等が何をし、何を考えてこの国をこうしたのか……もちろんわたしに知る由はない。

この国は守られている。

何に、と言えばわからないけれど、何かから守られているのは確かだつた。

国土全体がと言つより、中央都市ハシルスがだ。
守られているのか、はたまた、隠滅すべき何かがあるのか わからぬわたしには、結局、何とも言えないのだけれど。

「ディノ様は隠し事が下手過ぎます」

ディノ様もバーべナ様もラキュー・シア様も、ことあるごとにルシア様を気に掛ける。

それを周囲は『それだけ認められている者』であると好意的に捉えるけれど、わたしはそれだけではないよう思つ。事実としてルシア様の実力は屈指のものであるし、人柄も紳士的ではあるが……の方は、捉えどころがないのだ。

「……こののは、あまり好きじゃないんだけどね……」

はあ、と溜め息を零し、四角くくり抜かれた青空を見上げた。

わたしはわたしでいたい。

けれど、わたしがわたしである限り、切っても切れない特殊能力が時折行く手を阻む。

同じように ルシア様にも、そんなことがあるのだろうか。やはりそれは、わたしの知る由もないことにほ違ひないけれど。

執務室に戻れば、我が上官ちからコンツィア様は立腹だった。

「……何故、こんなに遅いんですの」

「あ、ええっと……も、申し訳ございません…」

「……」

報告に行つてからゆりひ一時間は経つており、つぶらな翡翠色の瞳

は剣番だった。

「……もういいですわ、下がつて

「は、はい」

すゞすゞと退室するしか術のないわたしは、それでも、少しだけ気分が軽い。

ドアを開けたところで、「……ロイズ」と声が掛かった。

それだけで弾む胸を、どうして止められようか。

それだけで笑みを浮かべてしまつわたしを、誰が責められようか。

「は、はいっ！」

「……声が大き過ぎますわ」

「あ、は、はい……」

いつだってわたしは、何十と歳下な筈の彼女には逆らえず、極度の緊張からか口調は常に吃りがちだ。

「……」

呼び止めたミレンツィア様は無言だった。

何かを思案するように、難しい顔をしてわたしを見詰めている。やはり役立たずだと思われてしまつたのだろうか。

沈黙は重く、それ故に胸を締めつける。

グレーデンの魔女についてはルシア様が片をつけたが、わたしとミレンツィア様の主従関係において、それは未だに保留のままだ。

「……本当に……」

「え、はい？」

小さく呟かれたそれを聞き取ることが出来ず、少し身を乗り出して

首を傾げた。

明らかにむつとした表情を浮かべたミレンツィア様はすぐ、取り繕うように大きく息を吐く。

「……本当に貴方、ジャガーノート特殊能力者なんですか？」

その脣から紡がれた言葉は、ただただ、わたしには重かつた。

「……はい」

小さく小さく、肯定をする。

わたしが特殊能力者でなければ、こんなに萎縮することはなかつた
だろうか。

わたしが特殊能力者でなければ、違う関係が築けていただろうか。
わたしが特殊能力者でなければ、こんなことにはならなかつただろ
うか。

無意味なことばかりが頭を駆け巡り、落胆の色は隠せなかつた。
いや……そもそもが、彼女に隠し事など最初から出来なかつたに違
いない。

今回露見しなかつたとしても、いつかはこうなつていただろう。
一瞬、事の発端だとも思えるゾルゲに心中恨み言を漏らしそうにな
つたが、彼は彼なりにわたしを心配してくれてのことだったのだと、
何とか、自分の中で消化を図つた。

そしてまた、小さな唇が開かれる。

「役に立つのでしょうかね」

「……は、い？」

一瞬、何を言われているのかがわからなかつた。

「『はい？』じゃありませんわ。その能力、どんなものかは知りませんけれど、わたくしの役に立つのでしょうかね」

「もつ……もちろんです！」

拒絶されないのなら、傍に置いてくれるのなら、その視界の端にでも映ることを許されるなら、わたしはきっと、このジャガーノート特殊能力をミレンツィア様のために役立たせてみせよう。

ミレンツィア様が細く息を吐ぐ。

軽く肩を落としたのは、諦めたのか認めてくださつたからか。

「……これからもしつかりと、わたくしに努めるようお願ひします

わ

「まつ……はいっ！」

真っ直ぐにわたしを見た翡翠の瞳には、満面笑顔の、それでいて酷く泣きそうな顔をしたわたしが映っていた。

そうして時は経ち百四十七年後、実力を認められたミレンツィア様は、ラグト国第一王女アリア・リタリナ・ラグトリア様付き魔術師となられる。

ミレンツィア様は少しずつ、しかし、確実に変わられようとしていた。

パピロの街でルシア様に言われたことについて、『自分の中でいろいろと思案されたのだろう。

物腰が幾分か柔らかくなり、他人に対する高圧的な態度もだいぶ改善されようとしていた。

変わらずその瞳が常に追い続けるのはルシア様であつたけれど、ただ傍に置いていただけるだけで、わたしはしあわせだった。

わたしは、わたしだけは、しあわせだったのだ。

アリア様がお産まれになられて、美しく成長するにつれ、何かが歪んでいくことに気づいた。

それは、王妃を亡くした国王の歪んだ情愛。

ルシア様のアリア様を見る朱き瞳。

何故か　　後者において、その答えをまだ、わたしは持つていなかつた。

それからまた三年後の　　そう、あの邂逅までは。

「……ラジア……ゼルダ

？」

ぱってりとした肉欲的な薔薇色の唇から零れたのは、彼の『伝説』と呼ばれる裏魔術師の名前。

彼女自身に覚えはない様子だったが、ルシア様と噂の立つた裏魔術師をミレンツィア様が忘れる筈がない。

そして、わたしは気づいてしまった。

見たことがなかつた『伝説』の彼女は、色彩と雰囲気こそ違えど。

あの講習会にわたしは参加しなかつたが、それを後悔することになりとは。

ばらばらと大勢の兵士達がアリア様を含めた三人を囲むがしかし、黒髪の青年の背後はがら空きだつた。

無駄足だつたな、と密かに落胆し、アリア様が連れ去られるとして、その後の足取りを冷静に分析する。

「逃がさなくてよ、ラジア・ゼルダ」

「……会つたことあつた？」

明らかに憎悪の色を浮かべたミレンツィア様に対し、ラジア・ゼルダは全く覚えがないようだつたが、それがまたミレンツィア様の自尊心を傷つけたことは言つまでもない。

案の定、黒髪の青年はアリア様を抱え、ひらりと塔から飛び降りた。

「き、きやあああ　むぐつ」

「ア、アリア様！」

アリア様の叫びを追うよつこ、ミレンツィア様の声が響く。

「お、追え！賊を逃がすな！アリア様を奪還せよー。」

ミレンツィア様の怒声と追つて放たれた無数の火炎系魔術矢をひらりひらりと事もなく避けては遠ざかる後ろ姿を見詰めながら、「ああ……」と小さく声を零した。

「ラジア・ゼルダ　貴女の所為で、ルシア様は……！」

きっとミレンツィア様も、一人が並んだ姿を見て、よつやく気づいたのかもしれない。

以後、アリア様が発見されることはなかつた。

国王は新しい若き側室を次から次へと後宮に迎え、狂つたように肉欲に溺れている。

政はほとんど放置され、魔術師総括のティノ様と宰相が中心となり、

何とか国政を仕切っているのが現状だ。

ルシア様は相変わらず、紳士的であったが、ディノ様は僅かな異変に気づいていたかもしれない。

一度、総括執務室を訪れた際に、ドア越しに責め立てるディノ様の声を耳にした。

防音壁さえ張りすにいたところを見ると、相当我を忘れていらしたのだろう。

「この国も終わりですね」

ルシア様の嘲笑うような言葉が、印象的だった。

「ああ……」

そつとそこを後にしたわたしがどうしたのかを、はっきりとは覚えていない。

気づけばいつも通りにミレンツィア様の執務室前にいて、『えられ

た補佐官室のデスクで、ぼんやりと視線を落としていた。

「ロイズ

はつと我に返ったのは時間にしてどれほどだったか。目の前には、我が上官であるミレンツィア様がいた。

「な、何でしようか」

ミレンツィア様が自らわたしの前に立つなど、仕えて以来、初めてのことだった。

「貴方はわかっているかもしませんが……この国はもう終わりですわ」

この国は終わる。

ルシア様も仰っていたが……残念ながら、わたしも同意せざるを得ない。

ラグト国自体は続くかもしれないが、反乱が起きるのは必至だらう。現国王はもう使いものにはならない。

ミレンツィア様は真っ直ぐに、立ち上がったわたしの瞳を射抜いて言った。

「いつかの言葉を覚えていて?」

忘れない、忘れてはならない。

例えそれが、茨の道であろうとも。

「……これからもじつかりと、わたくしに努めるよつお願いします
わ」

歪んでしまったのは何か　何故か。

誰かを愛しく思う気持ちは、何故、美しく棘があるのだろう。

「何があのうと、わたしはミレンツィア様のお傍に」

微笑んだわたしの瞳に映つたのは、泣きそつで、それでいて憎悪を滾らせた一人の女だったと言うのに。
わたしはわたしである限り、ミレンツィア様を捨て置くことなど出来ない。

茨の道の先は、果たして天国か地獄か。
貴女となら、どこまでも墮ちて行こうと、出合つたときから決めていたのだから。

Witch of Gloden・7 sideロイズ(後書き)

Extra Chapter 1『Witch of Gloden』
n『完結』。

リザが怒った。

珍しいこともあるものだと、あたしは暢気に構えている。

手離すいい機会かもしねない。

生きて行くために必要なことは、だいたい教えた。

剣術も仕込んだし、腕は一流なのだから、高給取りの傭兵にでもなれるし、それならそれで一人で充分。あるいは誰かを伴つたとしても、やはり充分事足りるだけは稼げる。

容姿だって、それはもう見事に、あたしの予想以上に綺麗な美青年に育つたのだ。

囮されることをよしとするなら、そんな生き方だってリザには可能だらう。

そう、これは確かない機会。

リザが親離れを叶うことない幻想から引き離すための。

ことの発端は余りにもぐだらないことだつたけれど。

多分、あたしは酔っている。

頭がふわふわして、最高に気分がいい。

今日もポーカーと麻雀でしつかり稼いだ。

最高級の宿取っちゃったし、一人部屋だし、ベッド広いし。

そんなことを考えていたら、うつかり躓いた。

「おっ？」

「あっ」

「えっ？」

一人分、声が多いなーなんて考えていて。

次の瞬間、向かいから歩いて来た人になだれ込んでいた。

その時、ぱつちり唇を奪ってしまった。

「あ、すみません」

「い、いやっ、あのっ……」

そのままの態勢で謝った。

相手の見知らぬ彼はそれはもう動搖していて、見るからに若そうなぶん、初めてだったら悪かつたなどと、どうでもいい罪悪感が少しだけ胸を掠める。

あたしは特別何とも思わず、思ったのはそれくらいだった。

が、凄い勢いで引き剥がされる。

振り向けば、何とも言えない壮絶な笑みを浮かべたりザがあたしを抱きかかえていた。

その視線の先の見知らぬ彼が、これでもかと目を見開いていたのが……ちょっとおかしくて噴いたけれど。

そうしたなら何故か、今度はリザに睨まれた。

そうして無言でそのまま宿に運ばれ、部屋に軟禁され今に至るわけだ。

何かあたしに落ち度があつただろうか。

いや、ない。

ただ、あの時の笑顔は、とにかくすこじぶるに壮絶なものだった。それだけはわかる。

煙草をふかしながら、ベッドに寝転ぶ。

そして、考えた。

今夜の部屋は別々。

幸いにも、リザは怒つてはいるようだが、あたしの部屋に来ない。

……思い当たる節はないが。

ないが、離れるいい機会ではないだろうか。

お金はリザに預けてあるので、当分、困ることはないと思う。あたしはまた賭け事なり本職なりで、稼げばいいだけの話だ。

このまま。

このまま、あたしがいなくなれば。

いつまでも、今までいいはずはない。

リザには限られた時間を穏やかに、緩やかに。そう生きて欲しいと、あたしは願つている。

わざわざいつか来る避けられない別れをあたしと経験する必要はないし、それにリザが付き合つ必要だつてない。

魔力を持つ者とそうでない者の別れは、それこそ壮絶なのだから。

あたしは立ち上がり、支度をすると部屋を出た。静かにドアを閉め、物音を立てないように歩みを進める。

深夜の廊下は薄暗かつた。

また躊躇したりしては元も子もないのに、暗視可能な魔術を目元に施行することも忘れない。

「……これ、使うのすご~に久しぶりだな

リザを拾つついぶん前に、暗殺を請け負つて以来だつたなど、苦笑を滲ませた。

そんな大層な任務でも依頼でもない。

ただ、一人の青年からそつと離れるだけのことなのに。

リザの部屋の前で、一度足を止める。

起きてはいなさいだろ？

夜中もいいところだ。

小さく溜め息を零して、笑った。
少しだけ、寂しさが胸を掠めた。
けれど、気づかない振りは得意だ。

「……じゃあね」

眩いで、歩き出すとしたその時。

「じゃあねって、何

思わず目を見開いた。

驚いた。

ドア越しに、リザの言葉が響いたのだ。

がちゃっとドアが開いたかと思つと、物凄い勢いで部屋に連れ込まれる。

何。
何で起きてるの。

腕を掴まれたまま引きずりながら、あたしはベッドに押し倒された。

「どうしてつもつだったの

あたしは答えない。

「……行くつもりだったの」

いつものリザでじやなかつた。

腕を押さええる手に、力が籠つている。

あたしは、あたしを見詰めているだらうその蒼を見ることが出来なかつた。

「……置いて行くつもり、だった、の？」

そう。

「……俺を、置いて？」

そうだよ。

「……何で？」

だって。

「……何で！？」

だって。

だって 何？

あたしは、わからなくなってしまった。

「リザ、聞いて」

「聞かない、絶対に聞かない」

ぬるま湯に浸かり過ぎて。

「……リザ」

「聞かない！」

見上げた蒼が泣き出しちゃうで。

「……リザ」

「聞かないからー聞かない……絶対……」

「リザ」

「……絶対……いやだよ、ラジアちゃん……」

何度か呼べば、切なそうに、泣き出しあり笑つから。

びひして泣き出しそうなのに笑うんだろう。

びひしてあたしの名前を呼んで笑うんだろう。

押し倒した腕はいつの間にかすっかり青年のもので、強く強く、あたしをベッドへ リザへと繋ぎ止めようとする。

それがあまりにも力強いから、あまりにも、あたしを求めているようだから あたしは、何が正しいのかが、わからなくなってしまった。

3 2 sideリザ

俺の下に組み敷かれたまま、ラジアちゃんは何度も、俺の名前を呼んだ。

「ラジアちゃんはわかっていない。」

そんな目で、そんな顔で、俺を呼ぶことがどうこうとかをわかつていらない。

俺が怒っている理由も、きっとわかつていないんだ。

わかつて、ねえ、わかつて。

伝わって、ねえ、お願ひだから。

そうずっと思っていた。

なのに今は、何故かそれが逆に怖い。

伝わって、結果、こうこう行動に出られてしまったから。

怒っていた理由よりも、ラジアちゃんの取った行動の方が怖くて堪らなかつた。

ねえ、どうして。

俺は近づけないのかな。

どうして、この距離は縮まらないのかな。

どうして、こんなことになるのかな。

そんな顔させたいわけじゃない。

違つんだ、違つんだよ。

ビーハー、ビーハー、ビーハー、ビーハー。

いつからか俺は欲張りになつてて、知らなに内にラジアちゃんを困らせていたのかな。

ねえ。

「……愛してゐる」

ラジアちゃん。

「……愛してゐるんだ」

届かないとわかつていて、俺はラジアちゃんの肩に顔を埋めた。
届かないとわかつていて、ただそれを呴くしか出来ない。
伝わつてしまえばこうなると知つてしまつたのに、離れていくつとするのに、傍にいたいのに。

涙が出来上がる。

悲しくて、哀しくて、愛しくて。

それでも、諦めきれなくて。

「愛してゐる」

大好きじゃ足りない。

「愛してるよ、ラジア」

言葉だけじゃ足りない。

「……愛してる」

繋がるだけじゃ足りないんだ。

だから、お願い。

「……傍に、いさせてよ……」

置いていかないで。

きっと俺は、死んでしまつから。

「……うん」

思わず顔を上げれば、至近距離にラジアちゃんの優しい笑顔があつた。

「 ラジア」

「うん」

「愛してゐる」

「うん」

気がつけば、呼び捨てていた。

ラジアちゃんは、珍しく怒らなかつた。

わかつてゐる。

ラジアちゃんの「うん」は俺の言つてることを何となく理解しただけ。

受け止めてくれたわけでも、受け入れてくれただけでもない。ただ『わかつた』だけ。

「ラジア、ちゃん」

「うん?」

少し動けば睫毛が触れてしまいそうな距離で、俺はその夜色の瞳を捉える。

「」
「 何が
「」「めんね」

何がつて、色々。

ラジアちゃんの指が、俺の頬を撫でる。

まだ、きっと、俺の知らない何かをラジアちゃんは抱えていて。
俺の知らないところで、泣いているかもしない。
泣いてはいなかもしれないけれど。
それでも。

「傍にいたいんだ」

だから、囁かせて。

言葉だけでもいいから、囁かせて。

ラジアちゃんは、その綺麗な顔でただ、笑っていた。
頬を撫でていた手はいつの間にか止まつていて。

触れそうな睫毛を伏せて、そっと、口づけを交わした。

届かない想いを沢山囁けば、いつかそれは届くのかな。

傍にいたいとたくさん願えば、いつかそれは叶うのかな。

大好きだから。

大好きじや足りないから。

愛しい気持ちを込めて、その華奢な体を抱き締めた。

「ねえ、ラジアちゃん」

「何、まだ何かあるの」

「……したい」

瞬間、凄い勢いで吹っ飛ばされて、壁にめり込んだといひで意識は途切れだ。

俺、バカかもしれない。

それでもやつぱり、貴女しか見えない。

「待てえええっ！」

「待たない」

「つ！」

俺達は今、全速力で逃げている。

ラジアちゃん、足速いなあ。

そんなことを思いながら、後ろを追つて来る人影に目をやつた。
長い黒髪のポニーテールを揺らして、灰色の瞳は怒りに歪んでいる。
ところで、何で彼女から逃げているのか、俺は全くわからない。

「……どこかもわからない。」

ラグト国での一件である付近にいたくなくなつたラジアちゃんが、「
遠くに行く」と言い出して、ぽんつと飛んできた場所だ。
転移術つて便利なんだな。

「知り合いで？」

たぶん、そうだと思つけれど、一応聞いてみた。

ラジアちゃんは答えない。

けれど、スピードは落ちることがない。

「何したの？」

「……」

「ねえ、何したの？」

「……あなたもあいつもしつこにな

ちらと俺を見て、ラジアちゃんは苦々しく咳いた。

「だつて……」

「待ああてええええっつのおおおおおつー！」

「の人、何かもう取り憑かれたみたいにすごいよ」

全速力で逃げるラジアちゃんに、全速力で追い掛けてくる見知らぬ彼女。

前者ももちろん珍しいけれど、後者の危機迫る感は特にものすごいくて、正直、苦笑いを通り越してこわい。

「……金を借りただけ

相変わらず全速力で走りながら、俺は首を傾げた。

本当に珍しいこともあるものだ。

あのラジアちゃんがお金を借りるだなんて。

俺が拾われてから今まで、一度も見たことがなかった。

「利子付けて返せ！さもなくば担保を渡せ！」

「どうせ無効だよ

言つて、ラジアちゃんは指を鳴らした。

ドオ　ンッ！

後方、ちょっと俺達とその人の間に、爆発音が轟いた。

ラジアちゃんは気の長い方じゃない。

どちらかと言えば、短い方に属していると俺は思つ。

永い時を生きているのに気が短いなんて。

そんなちぐはぐな所も好きだと、こんな状況で思つてしまつ俺は、
やつぱり重症だ。

とは言え。

「ラジアちゃんでも同じ」とするだろ? 「あの人何だか不憫だね

」

ラジアちゃんは答えなかつた。

何とか巻いて、ここは街外れの食堂。
一階は宿屋になつてゐる。

「あの人、大丈夫かな？」

ラジアちゃんは容赦しないから、とは言わなかつたけれど。

「あれで死んだら、笑い者だね」

「あの人、魔術師なの？」

「魔力はあるけど違うよ」

煙草をぼんやりとふかすラジアちゃんを見て、首を捻つた。

「魔力を持つ人って皆魔術師になるんじゃないの？」

「なる素質があるってだけ。魔術を扱うにはそれ相応の技術がないと無理だし、技術を学んでも別の職に就く場合もある」

「へえ」

ぶあつと煙を吐き出して、ラジアちゃんは「ん？」と考える素振りを見せた。

「あんた、学校で習わなかつた？」

「学校？……ああ」

昔、ラジアちゃんがお金の魅力に負けて、無理矢理俺に行かせたあれか。

「行つたけど、やる気なかつたから。今覚えたよ
「まあ、いいけど……いや、よくはないか……」

ぶつぶつ言い出したラジアちゃんのお小言が始まる前に、ご機嫌を取るつもりでアップルパイを注文する。
注文が終わつて向き直つたなら、

「げ

ラジアちゃんがあからさまに嫌そつた顔をしたのと、急に頭上から影が落ちたのは同時だった。

「よう、ラジア」

見上げれば、俺の後ろに男の人立つていた。
人懐っこそうな笑顔を浮かべた綺麗な顔立ちのその人は、ラジアちゃんを見てから、しげしげと俺を眺める。

「へえ、これが噂の」

俺の顎を捉えてそう口にした彼は、黒い長めのショートに灰色の瞳。

……あれ？

「……さつきの人！」

似ていた。

あの人は女人だったけれど。

「何なの、リウゼ」

「あれ？ カウゼに会わなかつた？」

「吹つ飛ばした」

答えたラジアちゃんを一瞥して、リウゼと呼ばれた彼は、また俺に視線を戻した。

何だろう。

どうせこういつことをされるなら、ラジアちゃんの方がいいんだけどな。

そんなことを考えて、軽く首を捻る。

「この人、誰？」

やんわりとその手を退けて、ラジアちゃんに聞いてみる。

「リウゼ・ララウ。賞金稼ぎだよ」

どこのでだったかは忘れたけれど、聞いたことがあった。俺でも知っている。

ということは、かなり有名であるということだ。

ラジアちゃんと仕事をしたときだったか……いや、学校に行つていったとき？

何度かその名を耳にした。

確か双子で、お姉さんがいるとか何とか、聞いたような。

「さつきのが、カウゼ・ララウ」

俺の心を読んだかのか、ラジアちゃんが言った。

通りで似ているはず、彼女はお姉さんの方なのか。

「で、お前がリザ・レストル？」

何故か席についてラジアちゃんが注文したラスクを食べ始めながら、リウゼは興味深そうに尋ねた。

ここにきてさつきのアップルパイが登場し、ラジアちゃんはそつちにかぶりつきだ。

相手にするつもりは毛頭ないらしい。

視線がぶつかる。

何だろう。

何となく、敵意みたいなものを感じて、俺は僅かに顔をしかめた。

昼飯を食べ終えて外に出る。
あたしは不機嫌だった。

「……ちゅうと」

「何、どうした?」

「何でついて来んの」

しかめ面でリウザを睨みつけたが、その飄々とした笑顔が崩れるこ
とはなかつた。

何だかすこぶる憎たらしい。

本当にこの双子は変わっていない……昔から、という意味で。

今日はまついてない。

清々しい森での散策を堪能するためにわざわざラグトから飛んでき
たのに、朝っぱらから珍獸カウゼにエンカウント。

巻いたと思って昼飯を堪能していれば、片割リウザにもエンカウント。

何なんだ。

厄日か。

大体何でこんなところで……

「……………」

「……」「何、どうした?」

「ヘルリッシュ小国の一級シティの街だけビ

……エルリツツ小国だつて？
リーザイの街だつて？

当然に答えたリウゼのそれに、一瞬、フリーズした。

「迷つて來たとか……なわけねえか」

「飛んでは來たけど」

「飛んで？ああ、転移術ね」

リウゼとリザの会話にも入らない。

そう、あたしは飛んで來た。

だから若干疲れている。

疲れている上に、さつき一発食らわせたので、より疲れている。
とにかく、『知る限りで一番気分転換になりそうな森』をイメージ
して飛んだのだ。

転移術は訪れたことのある場所のみ移動が可能だ。
例外もあるけれど。

そして、カウゼとリウゼの住む場所は確か、エルリツツ小国南部の
テテの森 リーザイとは隣接している。

ラグト国からは二つの国と一つの荒野を挟んでおり、歩いて來たな
ら……どれほど掛かるかは知らないが、とにかく遠いのは確かだ。
テテの森は小さいながらも緑豊かであり、野鳥の数もずば抜けて多
い。

小国と自ら名乗るだけあり、他国に侵略の意志がないことを堂々と
公言している数少ない平和主義国であることも有名だ。

まあ、軍事力自体も小規模だから、そんな大それたことの実現自体が困難ではあるけれど。

あたしは大きく溜め息をついた。

「ついてきたって、あんたの仕事の足しにはならないでしょ」「話題変えるなよ。まさかお前、イメージだけで飛んで来たの？」
「うぬせこ、ついて来んな」

早くどこかへ行つて欲しい。

お前らのことはイメージに入つてない。
いつカウゼが乱入して来るか、わかつたものじゃない。
気が気じゃない。

「そう言つなよ。なあ、リザ？」

何でリザ。

睨んだまま、あたしは首を捻つた。
そつきからやたらとリザに絡んでくるな。

リザは訝しげにリウゼを眺めているが……リウゼに限つて、効いて
いるとは思えない。

「あ、カウゼには早く返済した方がいいぜ」

「こいつの話よ。あんなの無効、時効」

ああだ「いつだと」言ひ争つてゐると、リザが後ろから抱きついて來た。

「……何」

「つまんない」

「は？」

あたしが楽しんでも思つのか。

ぎゅっとあたしを抱き締めて、リザは口を尖らせた。

「今日、していい？」

……捨ててきたい。

意味がわからない。

いいわけあるか。

あたしが憮然としていると、突然リウゼが笑い出した。

「俺が邪魔つてことね」

リザを捕えたその目は笑つてない氣がするけれど。

「最初から邪魔だけだ」

リウゼに一瞥くれて、言い放つ。

この話題になるずいぶん前から、あんた達双子は呼んでない。

「……お前、ほんとにわかっていないねー」

がしがし頭を搔きながらリウゼは軽く溜め息をついた。
溜め息つきたいのは、あたしなんだけど。

「今日はしたい

いつかはいつかで、どうしようもない。

「何なの」「
したいの」「
娼館行く?」

途端、リザの眉間に皺が寄った。

「ラジアちゃんとしたい

埒があかない。

全くの平行線だ。

「あんたの所為」

「何で俺」

何でかはわからないが、間違いなくツウゼの所為だと想つ。

とにかく。

何でもいいから、ツウゼはビックへ行って欲しい。

余計に面倒なことになる前に。

仕方がない。

少し体力を使うが、やむを得ない。

「じゃあね」

「あつ、狡いぞ！」

ぱちんと指を鳴らして、ツウゼの言葉を聞く前に、あたし達は、その場から消えた。

「うー、うー？」

「……あー」

「まだリーツァイの街？」

「……夕飯は美味しいものが食べたかったの」

街の南部から北部に移動しただけだった。

だって……疲れてるから。

この辺は鶏のササミが美味しいしね。
まだ食つてないしね。

「転移術つてのは魔力消費が激しいのよ」

「今日一回目だもんね。大丈夫？」

「あんまり」

取り敢えず道を歩いていないぶん、リウゼに探知され難いのは確かだ。

あいつは職業柄か、やたらと鼻が効くから油断は出来ないけれど。
どうせすぐに転移術を使えるわけじゃないので、仕方ない。

鶏のササミで、気分転換するしかなさそうだった。

俺、何でこんなところにいるんだね?。すっかり田の暮れた空に浮かぶ月を見て思つ。

「……朱くないのに」

あの後、ラジアちゃんは転移術で宿屋前まで飛んだ。すっかり俺もそこに泊まるつもりでいたのに、夕飯を済ませたら俺をここまで連れて来て、疲れたからという理由で、そのまま強制的に娼館に置き去りにされている。

目の前では知らない女^{ひと}が一人、俺の上に乗つていた。いつの間にか俺の服をはだけさせて、何だか好き勝手にしてくる。文句を言つだけの気力も湧かずに、ただ、それをぼんやりと眺めていた。

「ねえ、お姫さん。名前何て言ひの?。」

媚びた視線を無意識に受け流す。

ラジアちゃんは、そんな風に俺を見ない。もっと優しくて、もっと綺麗な瞳で俺を見る。

俺は答えなかつた。

答えたくなかった。

ラジアちゃんに貰った名前は、ラジアちゃんだけが呼んでくれたらしい。

彼女は気にする様子もなく、相変わらず好き勝手にしている。

「ふふ……好きなくせに

厭らしく笑つて演技じみた瞬間に、小さく溜め息を零した。

『好き』か そうだね。

「……好きだよ

好きだよ、ラジアちゃんが。

当たり前で絶対的なその答えを前に、ただただ、切なくなつた。

娼館に置き去りにされた俺。

誰かさえも知らない娼婦に好き勝手にされている俺。

違うのに、そうじゃないのに、それしかなくてなすがままになつている俺。

「……気持ち悪くしてあげるから

その言葉に、知らず笑みを浮かべた俺は、何を考えていたんだろう。

嘲りか、諦めか、愛しさか、辱めか。

求めたものは絶対的に違うのに、反応する体と本能に嫌気が差す。

違う 器だけが反応するんだ。

本能が求めるのは、たった一人しかいないのだから。

……ねえ、ラジアちゃん。

ラジアちゃんは、どう思ってる？

ラジアちゃんは、俺をどう想ってる？

俺は、これがラジアちゃんだったらと思ひどどしそうもなく欲情するけれど。

あの朱い髪だつたなら。
あの黒い瞳だつたなら。
あの白い肌だつたなら。
あの華奢な体だつたなら。

「大好きだよ」

ふわりと風が舞い込んだ。

この風が、届けてくれたらいいのに。

現状を諦めて目を瞑る。

視界の端を白い月が、一瞬だけ掠つた。

「あれはねえよなあ……」

どかつとソファに座つて足を組む。

転移術とはね。

詠唱無しでやつてのける辺りは、流石としか言こようがない。

ラジア・ゼルダ 生ける伝説として名を馳せる裏魔術師。
その一つ名は今だ現役ってことか。

「何なのよ。辛氣くさいわね」

キッチンでがちゅがちゅと夕飯を作っていたカウゼが、苛々と一警
をくれた。

「……お前ね、ラジアに逃げられたからって、俺に当たるなよ
「はあ！？何で知つてんのよ！？てか、あーもーつ、思い出させな
いでよー！」

答えず煙草を銜える。

火を点けて、ぼんやりと搖らめく煙を眺めた。

「なあ、あいつをあ

「は？ どこつよ？」

尚もがちやがちやと騒々しくしながら、苛々とした声が返ってくる。
お前ね、何でそんなに一から十まで騒々しく出来るの？
弟の優しさで言わないけどね。

「リザ・レストル」

取り敢えず本題から逸れなによつ簡潔に言えれば、「ああ」と呟いて、
カウゼはその手を止めた。

カウゼは情報屋をしている。
で、俺は賞金稼ぎ。

双子なだけあつて職種的にも相性もよく、連携して仕事が出来るの
で、能率もいい。

「こりも、俺達の自宅兼事務所だ。

「で？ 何が聞きたいの？」

止めた手を拭いて、カウゼはこちらに来ると隣に腰掛けた。
ちらりと見たキッチンの惨状は……今は見なかつたことにしよう。

「知ってるだけ」

「ふうん……」

ちひりと俺を見てから、カウゼは考え込んだ。

「……確かに、孤児だったわね。拾われたのは六歳のとき。あれよ、ラジアがこの間滅ぼした国。あそこで拾われたの」

噂通りなのかと少し驚いた。

大抵、噂つてのは尾鰭おひれがつきものだ。

何となく耳にしてはいたが、まさかと思っていたのもまた否めない。

ただ、カウゼが言つなら間違いない。

こいつはこうがちやがちやした性格している割りに、情報の正確性は非常に高い。

「……で？」

煙を一つ吐き出して、先を促した。

「拾つたのは気紛れらしいわ。あのラジアが珍しいよね。リザはやたらと懐いてるみたいよ」

「まあ、だからこそ半信半疑、面白おかしく噂になってるんだろうけど」と、カウゼは何故か、溜め息混じりに続けた。
確実に今日逃げられたこと、吹っ飛ばされたことが尾を引いているが、今それはどうでもいい。

確かに珍しいのだ。

ラジアは、他人を寄せつけない。

それは俺の知る限り出会った当初からずっとで、だいぶ打ち解けて旧友と呼ばれるまでになつた現在に至つてもだ。
俺達にでさえ、なのに 特に、あの朱い月の夜から。

「そうそう。リザは、ラジアに育ての親以上の感情を持つてるみた
いよ」

カウゼの言葉に、知らず、表情を歪めた。

「……やつぱりなー……」

途端カウゼの眉が跳ねる。

「何よ、やつぱりって」

「今日、会つたから」

「ラジアもー？」

「あ

しまつた。

「何で言わなこのよーちょつとーあのときの賭け金、返済するつ
に言つた!??

カウゼが喚き立てる。

相当根に持つてゐるな。

ここもまた弟の優しさで、敢えて言わないが。

ぶつくを言つたカウゼを横田に、俺は煙草を捻消した。
部屋へ戻ろうと腰を上げたとき、カウゼと田が合つ。

「あんた、何でリザのことなんか?」

「……リザは、まだ?」

「……普通の人間らしいわ」

そうなのか。

だからあんなに、余裕がなかつたのか。

「ラジアは……止めときなぞによ
や

カウゼの言葉に、軽く手を振って返す。

飽くまでも『確かに聞いた』といつ返しであり、『理解した』といふわけじゃない。

伊達に永く相方（双子）をやつてこむわけじゃないので、あいつもそこはわかっているはず。

「もう少しで夕飯だからねー！」

「わかったよ」

俺はリビングを後にした。

しばらくして、キッチンからはいい匂いが漂ってくるのだから、常々、カウゼの腕はどうかしていると思つ。

あの惨状と騒々しさから、まさかの絶品料理が製造されるのだから、世の中つてのは不思議なものだ。

それはラジアの行動然り。

「リウゼ　つ、つ」飯　つー

「あこや

さて、あいつの絶品料理でもつて、少しは気が紛れるだらうか。

「聞く耳持たずつて感じね」

リウゼの背中を見送つて、あたしは溜め息をついた。

リザのことを見ってきた理由はわかる。
ずっと傍にいるのは伊達じやない。

「あーあ」

また溜め息が出た。

永く生きていようと、あたし達は所詮、ちっぽけな人間で。
永く生きているからこそ、想いを上手く伝えることが出来ない。
躊躇う気持ちも戸惑う気持ちも、普通の人間と何ら変わりはないのに、それを理解してくれる人間は少なくて、永きを彷徨いながら、あたし達はそれを探し続けている。

リウゼも馬鹿だな。
言つりやえばいいのに。

姿の見えなくなつた廊下を眺めて、そんなことを思った。

「無理か。そういうとこ、へたれてんだよね」

眩いで、少し笑つた。

呆れだつたり、羨望だつたり、励ましだつたり、いろんなものがな
い交ぜになる。

リウゼの置きっぱなしにした煙草を銜えれば、火を点けた火元が、
じじつと、小さく音を立てて燃えた。

魔力を持つ者は、煙草を吸う人が多い。
それは、永い時の一瞬の暇潰しに過ぎなくて、同時に、存在を思考
する一瞬であり、癒しとなる瞬間もある。

『リザは、まだ?』

何を怖れている。
何もしないくせに。
何も出来ないくせに。

何も出来ない理由も気持ちも理解は出来るけれど、現状維持はリウ
ゼ自身の結果に他ならない。
理解は出来ても、擁護する気はさらさらないので。

まだよ、あの子はまだ。
けれど。

「……あつと」

ほんやりとあたしは思う。

ラジアは迷っているのだろう。

本当の自分に気づいていないかもしだれないけれど。

原因はラジアの鈍感さが占めている。

あたしは情報屋であって、情報収集も分析も得意だから。

何となくわかる。

直感が訴えている。

まあ、永い付き合いだしね。

吐き出した煙は、ゆらゆらと漂つ。

彷徨つて、消えて行く。

あたし達はこの瞬間、自分を重ねる。

そして、願わざにはいられないのだ。

誰かと共に在りたいと。

「あいつも大概モテるけど……本当、ビニがいいんだが」

誰が手に入るだらうか。

誰よりも強いと謳われ、しかし誰よりも脆くあり、朱く染まつた月
が閉ざしてしまったラジア・ゼルダの心を。

ルシアは駄目だつたらしげ、あいつは変態だから仕方ない。

リウゼ?

それとも、リザ・レストル?
それともまだ見ぬ誰か?

「……クラチカ」

貴方は、誰だと思う?

懐かしく、そしてどうしても禁忌を思わせるその名に、鄙い陰りが
差す。

貴方は何を思う?

貴方は何を望む?

貴方が思う最善は何?

貴方なら誰がいいと?

ラジアの救いは?

「……馬鹿ね」

またもや溜め息をついて、あたしは煙草を吸つた。

あたしが心配することじやない。
決めるのは、ラジア本人だと言つのに。

永遠の夢を。

手に入れるも入れないも、ラジア次第。

難しいことでは無いはず。

例え、あたし達より永く、この世に縛られ続ける定めでも、あいつにはそれを実現するだけの^{すべ}術があるのだから。

「でも、お金は返して貰つからね」

それとこれとは話が別で、金銭面はきちんとするべきなのだ。
もし。

銜え煙草でキッチンに向かい、作り掛けの料理の仕上げに取り掛かる。

う ん……我ながら何て言つか……いい匂いだわ。

「リウゼ つ、『』飯 つ！」

「あいよ

可愛い……いや、可愛くはないけれど唯一の弟が軽くへこんでいる
ことだし、あたしの絶品料理を食わせたらせりやと寝かしつけて、
明日、ラジアに会いに行こう。

「あ？」
「で？」

「美味かつたでしょ？」

「まあな」

綺麗さっぱり片づけられた皿の数々に胸を張れば、食後の一服に手を伸ばしたリウゼが、訝しげながらもそう答える。

「……何で煙草を取り上げた？」

眉を寄せたりウゼの代わりに一本抜き取り、緩慢な動作でそれに火を点けた。

より眉根の皺を深くするリウゼ。

「今日はあたしが作ったの。で、あんたがすることは？」

「お前……傷心の弟に優しさはないの？」

「諦めてないくせに」

しばらく皺を引っつけたまま固まるこつは、未だ、あたしのことを見つけていない。

どうせ、がちやがちやした騒々しい奴だとくらいにしか思つていまいに違いない。

姉として、情報屋としての観察眼を舐めてもらひちや困る。

まあ、現状としてキッチンは惨状の残骸で溢れ返つてゐるわけでも間違つてはいなかもしれないけれど。

何であるのかは、自分でもわからないので、何とも言い難いが。

「…………やれつて」とね

「へじゅく

ちりと残骸に視線を遣つたリウ・ゼが、肩を落として、つこでに溜め息を零した。

「何でああなるの…………？」

それは誰にもわからないんだよ、リウ・ゼ。

これから先に起るひと同じへりこみ。

疲れた……流石に、詠唱なしでの瞬間移動は体に来る。

「若くないからなあ……」

こういうとき、外見が若いままだと揃するような気になるが、体力は体に比例していると考えた場合、やはり、気持ちの方の問題だらうか。

いや、そもそもが魔力消費の問題であつて、厳密に言つならば体力は関係ない。

咳いて、じきりとベッドに沈み込んだ。

あたしは若くない。

幾つだつたかなんて、もう忘れてしまつたけれど　それほどまでに永く生きている。

あたしの魔力は半端なくて、役立つかれど、恨めしく呪つひとの方が多い。

明日にでも起きてしまえばいいのに。
眠つたまま朽ちてしまえばいいのに。

そればかりを願つて、あの日、あたしは国を一つ滅ぼした。

どこの国だったかは覚えていないし、理由だつてそう大したことじゃなかつたような気がするが、あの頃のあたしは、他人なんてどう

でもよかつた。

あの二百年は、ただ毎日が、地獄のよつて思えていた。

裏稼業ばかりを請け負つて、自分ばかりがふしあわせなよつて思えて それでも死ぬことは出来なくて、ただひたすらに、生きることを紛らわせていた。

あたしに死は叶わない。

自分より強い者はそうそういなくて、殺されたいと願うのに、いざとなればそこに立ち、残っているのは常にあたしだった。

あの日、あの覚える氣さえなかつた国を滅ぼした日。何故、見つてしまつたのだろう。

見事な銀色は薄汚れていて、けれど、蒼い瞳は前だけを見据えて、崩れた瓦礫の中、立っていた少年。元々孤児だったらしいけれど、国を奪つたのは、紛れもなくあたしだつたと言つた。

「……リザ」

返事はないとわかっていて、その名を呼んでみる。

あたしが名付けた。

「……リザ」

「リザ」

あたしが育て、あたしが『与えてきた。

「……リザ」

愛しい愛しい者の名前。

いつだつて思つていい。

いつからかずっと、半身のよつて思つていた。

朱い月の夜は一人でいたいけれど、それでも、誰かと共に過ごす時間が愛しく思えるようになつたのは、貴方がいたから。拾つたのは気紛れで、罪の意識があつたわけじゃない。顔と髪が、あまりに綺麗だつたから。

あの時の姿が、余りに綺麗だつたから。

ただ前を見据える蒼の瞳が、何を見て何を思い、この先どうなつていくのか見てみたかったから。

……感傷的になつていてる。

軽く頭を振つて、煙草に手を付けた。

「『』めん」

「ごめん、リザ。

だから『君』、あたしは夢を叶えない。

軽くふかせば、紫煙は闇に溶けていった。

リザは今頃、高級娼婦とよろしくやつてこらだらう。

それでいいと思つた。

別に娼婦と結ばれることは言わないけれど、こつまでもあたしにべつたりつてわけにはいかない。

「どうしたもんだか」

遠く視線を投げれば、窓の外には、白い月。

ひとつあえず、カウゼから逃げる」とだけをあたしは考へる」とこしだ。

バンッと勢いよくドアが開かれ、同時に名前を呼ばれた。

「ラジア ツー。」

「！？」

驚いて飛び起きる。

そこにいたのは、見間違いでなければカウゼ。

「な、何で！？」

「あたしの情報網をなめないでよ」

得意氣にそう言つて、カウゼはにやつと笑つた。
「どうじうじうことだ。

「鍵掛かってたはずなんだけど」

「ここ」、顔が利くから

顔が利くつて……つまり、ここのは主人は情報を流した上に鍵まであり
つさり渡したと。

カウゼの性格を考えるとあつさりかはわからないが、結果に変わり
はない。

あり得ない、プライバシー保護はどこへ行つた。

あまりの突然の訪問者に、あたしは啞然としてしまつた。

「お金、返して」

てつと掌をあたしに出して、カウゼはさういふとあたしに詰め寄る。

そのと並

「ラジアちゃん！」

開け放たれたままのドアから、今度はリザが駆け込んで来て、そのままあたしに雪崩れ込む。

何なんだ。

勢いでバランスを崩して、あたしはベッドに倒れ込んだ。

「寂しかったー」

あたしの胸に顔を埋めて、リザはひたすら腕に力を込めた。ちょっとと離して、今あんたの心情とか知らないし、何より関係ないから。

空氣読め！

「その美青年が噂の？」

もう、その噂はいい……。

しげしげとリザを覗き込むカウゼに、あたしは溜め息をついた。

「ラジアちゃん、キスしていい？」

ちゅ。

了解を得る前に、リザがあたしの唇に口付けを落とした。

ちよっと。

あたしまだ、何とも言つてないんだけど。

尚も口付けを至るといひに降らせるリザを引き剥がして、よつやくベッドから降りた。

「よつラジア、朝から忙しいな

飄々とした声が、あたしを呼んだ。

顔を上げれば、ドアに背をもたれるリウゼが目に入る。もつ言うだけ無駄だが、ものすごい早朝なんだけど。

といつあえず。

「うぬせこか、ひ

実力行使で三人を追い出して、あたしはまたもや、深く溜め息をつ

いた。

「ねえ、お金返してよ」

といひ変わって、早朝の宿屋一階にある食堂。
あたしは何故か、四人で朝飯を食べている。
うやむやの内にあたしが支払うことになつた品々を前に、カウゼが
しつこく食い下がつっていた。

「じつこいな

スクランブルエッグを頬張りながら、あたしは眉をしかめて言つ。
そもそもこの料理の量からして、充分に返金分に値していると思う
のはあたしだけか　いや、それは流石に言い過ぎかもしねりないが。

「借りたものは返しなさいよ。」

「何で借りたの？」

リザがパンを千切りながら、不思議そつに聞いた。

何でつて。

「ポーカーでボロ負けしたんだよなー」

にやにやと笑いながら、代わりにリウゼが答えた。
うるさい、思い出したくないのに。

「ラジアちゃんが？ ポーカーで？」

リザが追い討ちを掛けるが、明らかに信じられないといった表情だ。

そう。

あたしが、このあたしが人生で初めて負けた。
思い出したくもない。

負けた相手を思い出すと、余計に眉間に皺が寄った。

「誰に？」

リザはひたすら信じられないらしく、首を傾げて食い付いてくる。
あたしだって信じたくないが、本当、空氣読め。

「氷の魔女よ。知らない？」

カウゼが代わりに答えをくれてやつた。

「……もひ最悪」

朝っぱらからあいつの名前を耳にするなんて、それだけであたしは今、すこぶる嫌な顔をしているだろ？

リザは、氷の魔女を知らなかつた。

裏業界ではそれなりに名の知れた人物だが、表に名が出ることは滅多にない。

「イメールダ・トーヤ。別名『氷の魔女』って呼ばれるのよ」

カウゼが説明しているが、あたしは黙つて、黙々と食べることに専念した。
悔しい。

何故あのとき、あいつがロイヤルストレートフラッシュで、あたしがブタだったのか。

魔力を使つたとか……いや、違うな。

悔しいがあのときの奴は、世界中の、はたまた奴の人生での全ての運を総動員してゐんじゃないかと思うほどに、すこぶる強かつた。

「何はともあれ、お金は返してよね」

説明を終えたカウゼは、にっこりと笑んで、あたしを見た。

結局、全額返金した上、しじたま利子を取られて、朝飯代も払わされて。

ついてない。

何だか、ことじんついてない。

リザに抱きつかれたまま、あたしはがっくじと肩を落としたのだった。

「で？」
「え？」

リザはす「じぶる」機嫌にこひらを向いたが、それこりじじやない。

「こつまでもくつ付いてるつもり？」

暗に離せと呑ませ睨みつけてみたが、効果のほどは予想通り薄かつた。

朝飯を食べ終えた後、あたし達は街を歩いていた。

カウゼとリウゼは、それぞれ仕事があるらしく、よつやくとばばかり

に解放され、財布の中身は軽くなれど、気分は上々だった。

が、二人と別れた後、何故だかリザがくつついでくる。腕に絡み付かれて、とにかく歩きにくいし鬱陶しい。

「ねえ、ラジアちゃん」

突然、リザが歩みを止める。

くつつかれていたあたしは、少しつんのめった。

「俺、やりたい」としても、いいのかな

つんのめったあたしに謝罪の言葉はないらしく、代わりに呴かれた言葉の意味を理解するのは難しかつた。

「何なのよ」

「何なんだろう……わからないんだ」

「はあ……まあ、いいんじゃないの」

全くもって話の筋が見えず、一瞬反射的に「何かの病にでもやられた?」と聞きそうになつたが、昨夜、娼館に連れて行つたのは自分でつて、それを口にするのは憚られた。変に蒸し返されてもよけいに面倒なだけだ。

そうは言つても避妊云々は自己責任であるとは思うが。

まあ、今の会話だけで答えるなら、リザの人生だ。
やりたいことをして、悪いわけはない。

やりたいと思うことをあたしが止める権利はないし、やりたいと思
うことをあたしが止める理由も権利ももちろんない。

「やりたいことが出来た?」

もちろん気になるのが、育ての親としての心情だ。
リザは何も答えずに、ただ、あたしを見ていた。

「我慢しなくても……いいのかな?
「?いいんじゃない?」

ここまで全く会話の筋は掘めていないが、再度そう答えることで先
を促した。

リザはときどき掘めないことを言う。

何を考え、何を思っているのか、気づいてしまえば後戻りが困難に
なりそうで、知らない振りをしてくるつむじ、掘めなくなってしま
ったと言つた方が正しいかも知れない。

「……そつかあ……」

何を納得したのか知らないが、端正な顔に、にこりと満足気な表情

が浮かんだ。

「結局何なの？」

「じつに来て

会話にならないんだけど。

ぐいぐいと引っ張られながら、首を捻ったままに、あたしは顔をしかめた。

「ラジアちゃんは言った 我慢しなくていいんだって。

それだけで気持ちは軽くなり、許されたような気ができるのだから、全くおかしなものだと自分でも思つ。

今になつてみれば、こうなるために生まれて来たんだついとさえ思えた。

自分が嫌いだつた。

自分が汚れていると思つて、疑つことはなかつた。

俺が俺でいられる理由はラジアちゃんのみであり、ただそれだけだ。自分の存在理由は自分のためではなく、ただ、ラジアちゃんのために。

おかしいことだと、盲信的であると、わかつてはいるけれどそれを止める気は最初からない。

さつきの一言で、それでいいんだと勝手な解釈をしてしまつてゐる。

俺はよくわかつていないうラジアちゃんを引っ張つて、そのまま路地裏へと入つて行つた。

ここは今朝、娼館帰りに見つけた、廃屋ばかりで全く人気がない場所だ。

まだまだ早朝とあって、辺りはより静まり返つてゐる。

「リザ?」

きょとんとして、ラジアちゃんは俺を呼んだ。

あまりの無防備さに思わず笑え、また、ラジアちゃんは眉間に皺を増やして首を傾げた。

彼女はわかつていない　いや、理解しようともえしていないので、俺はただ、そこに隠された本音を垣間見ている気持ちになつて、切なくなるばかりだけれど。

「…………、立つてみて？」

奥まで行つて、壁を指差せば、首を捻りながらもラジアちゃんはそこに立つ。

俺は、そんなラジアちゃんを見ていた。

薄暗い路地裏に、ラジアちゃんの白い肌が浮かび上がる。ただ、本当に綺麗だと思った。

綺麗で綺麗で、少しも汚れのない、何ものにも染まらない夜色の瞳は、今、俺だけを映している。

「無防備だよ」

「え。…………っ！？」

その無防備さが胸を締めつけ、これでもかと抉る事実を、ラジアちゃんはわかっていない。

ほんやりしているラジアちゃんの唇をハツ当たりのよつこ奪い、白

く華奢な両手を即座に拘束した。

こうすれば、魔力を使えないことを俺は知っている。
ずっと一緒にいた　だから、何だって知っている。

過去も昔も知らないけれど、今のラジアちゃんなら、何だって。

薄く目を開ければ、至近距離で視線がぶつかった。

その瞳は、俺しか映していないくて、酷く、俺を欲情させた。

唇を離せば、ラジアちゃんが口を開く。

「何して……っ、ちよ、つとー。」

「我慢しないことにしたんだ」

その言葉を遮つて、貪るようにまた口づける。

細く緩やかに曲線を描く腰をなぞり、柔らかく弾力のある尻を撫で、
そつと、深く入ったトップスのスリットから指を侵入をせる。

本能のままに。

絡めて。

吸つて。

啄んで。

柔いその唇も、舌も、その先でさえも俺だけのものにしたい。

角度を変えて。

深さを変えて。

最初こそ抵抗を見せたラジアちゃんは、その辺りからおとなしくな
すがままだった。

「……何で」

抵抗しないの？

唇を離して、耳朵を甘噛みしながら囁く。

膝下まである長さのトップスはスリットから挿し入れた俺の手によつて、腰を留めるベルトがズレている。そのままボトムに侵入することは容易く、それからはあつと、彼女を掻き乱すことよりも容易によひたれと思える。

わかつてこむはずなのに、どひじて。

壁に抑え付けられたまま、それでもラジアちゃんは、何も言わないままだつた。

ねえ、どひじて。

何を考へているの。

「…………ラジアちゃん…………」

感じの全てが愛しくて。

切なくて、泣きやうで、どひじようもなくて。

昨夜の娼婦を思い出しつゝ、吐き戻がした。

お願ひ。

俺のお願い。

このまま、俺に流されてしまつて。

もう片方の手で、ラジアちゃんの頬に触れる。受け入れて、突き上げられて、なすがままで、俺を受け止めて。

口付けようとしたその瞬間。

視線がぶつかつたその瞳が、挑戦的に細められた。

あ、やばい。

思つたと同時に、両手を離してしまつたこと、今更、気がついた。

パチンッ。

指の鳴る音が聞こえて、俺は容赦なく吹っ飛ばされた。

狭い路地裏。

俺は向かいの壁に、凄まじい音を立てて思いつ切りめり込んだ。

「……痛いー……」
「朝っぱらから向しようとしてんのよ」

軽く首を振る俺に、ラジアちゃんが睨みを効かせる。

「何つて……セックス」

思わず笑ってしまったのは嬉しかったからだ。

「こつもより軽いね」

へりりと笑ってそう言えど、容赦なく冷たい視線のみを投げられる。それでも今までと違うのは、追撃がないということ。その事実だけで、俺はまだ、しばらくは生きていける気がするのだから、本当にとんだ重症だ。

すたすたと俺を置いて、ラジアちゃんは大通りへと床って行く。笑つたままに立ち上がりれば、痛めたらしい腰が小さく悲鳴を上げた。これは……癌になつてそうだな。
軽く腰をはたけば、砂埃が舞い散る。

「ラジアちゃん」

あつといつ間に追いついて、俺はこつものポジションを歩く。

「『めんね』

何度も謝つても、うんともすんとも答へは返つて来なかつたけれど。

「……何笑つてんの、反省してんの？」

ようやく開かれた唇から零れた不平不満と、彼女がくれた一瞥に一瞬でも映り込んだ俺。

それだけでやっぱり、天にも昇るような気持ちになる。

「あんたはやつぱり、少しさは我慢しなさい」

そう呟いたラジアちゃんの顔が、本機で怒ったように見えた。だから ラジアちゃんがそう言つなら、少しやらこは我慢する」とこじよつと思つた。

だから、

「ねえ、ラジアちゃん」

今夜はベッドの隣を俺が埋めてもいいだらうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5977p/>

h.o's.O.way

2011年12月21日16時49分発行